

茨城大学  
社会連携センター

平成29年度

# 学生地域参画 プロジェクト 報告書

茨城大学社会連携センター  
平成29年度学生地域参画プロジェクト報告書

発行 国立大学法人茨城大学  
〒310-8512 茨城県水戸市文京2丁目1番1号

編集  茨城大学社会連携センター  
Ibaraki University Social Collaboration Center

問い合わせ先 社会連携センター(地域連携課)  
TEL 029-228-8585 FAX 029-228-8495  
E-mail [gakupro@ml.ibaraki.ac.jp](mailto:gakupro@ml.ibaraki.ac.jp)

IBARAKI  
UNIVERSITY



# 平成29年度 学生地域参画プロジェクト報告書

平成29年度学生地域参画プロジェクト報告書の刊行にあたって

茨城大学社会連携センター副センター長・地域連携部門長 西野由希子 … 1

平成29年度 実施プロジェクト

○地域活性ドローンプロジェクト …… 2

(代表者：人文学部・3年 正田 真悟)

○まなびの輪 ～大洗における多文化共生～ …… 4

(代表者：人文学部・3年 村上 柚香里)

○国連SDGs×イバラキ …… 9

(代表者：人文学部・3年 小泉 咲綺)

○地方創成事業 里山フォレストフェス 地域ブランディングプロジェクト … 14

(代表者：人文学部・3年 今野 香織)

○茨大生×東北プロジェクト ～茨大生と共にもう一度被災地へ、そして伝える活動～ … 17

(代表者：人文学部・3年 田島 彩花)

○現場から学ぶ茨城学 ～畑で広げる地域の「わ」～ …… 21

(代表者：人文学部・2年 木村 愛実)

○岡倉天心・五浦発信プロジェクト …… 26

(代表者：人文学部・2年 長永 勇太、丹治彩弥乃)

○西塩子の回り舞台茨大チーム …… 30

(代表者：人文学部・2年 長永 勇太)

○日本一つながる学食プロジェクト …… 31

(代表者：教育学部・2年 梅津 尊子)

○大洗応援隊！ ～OPEN OARAI もっと大洗を身近に～ …… 35

(代表者：理学部・2年 青山 実樹)

○茨大聞き書き隊 Notes …… 39

(代表者：工学部・3年 川原 涼太郎)

○県北空き家再生プロジェクト …… 42

(代表者：工学部・3年 鎌田 吉紀)

○あみゆめカフェ ～知って、好きになって、発信する 未来に繋げるカフェづくり～ … 44

(代表者：農学部・3年 中原 沙彩、鈴木 美果)

○FES (Food Education Supporter) ～食育応援隊～…………… 50  
(代表者：農学部・3年 小川 真澄)

○のらボーイ&のらガール ～食農教育プロジェクト～…………… 53  
(代表者：農学部・3年 寺尾 正樹)

○SENBA Project…………… 57  
(代表者：理工学研究科・2年 渡辺 康太)

平成29年度実施プロジェクト (スタートアップ版)

○廃校那珂湊二高を活用した多世代交流プロジェクト ―話題のグランピングに学生が挑戦― …… 60  
(代表者：人文学部・3年 阪本 咲)

○ひたちなか表町商店街活性化プロジェクト…………… 64  
(代表者：人文社会科学部・1年 越中 未穂)

○笠間栗さんまいプロジェクト…………… 65  
(代表者：人文学部・3年 松崎 薫)

○「かすみがうら市子ども未来フェス」サポート活動…………… 67  
(代表者：人文学部・2年 神田 紗帆)

(参考)

平成29年度「学生地域参画プロジェクト」募集要項…………… 69

平成29年度「学生地域参画プロジェクト(スタートアップ版)」募集要項…………… 72

## 「平成29年度 学生地域参画プロジェクト」報告書の刊行にあたって

「平成29年度 学生地域参画プロジェクト」の報告書をお届けいたします。本報告書には、20件の活動報告が掲載されています。

「茨城大学 学生地域参画プロジェクト」は、地域での活動に主体的に取り組もうとする学生たちのグループに対して、大学が予算や助言などによって支援を行うものです。10年以上継続してきましたが、6月はじめまでに募集して、7月から1月まで活動を行うプロジェクトが16件採択されたのは、これまでで最多です。また、今年度から、9月に募集を行い、年度の後半の活動に支援を行う「学生地域参画プロジェクト（スタートアップ版）」を始めましたが、こちらにも4件の応募があり、それぞれに活動を行いました。

本報告書をご覧いただければわかりますが、件数だけではなく、学生たちの活動テーマも、地域もより広がっています。新しい、魅力的なテーマもあり、また、活動を継続し、年々、内容が深化しているプロジェクトもあります。活動の中では、問題にぶつかったり、苦勞をしたりしたことも感じられますが、その全てが学生たちには貴重な経験になり、次につながっていきます。このように、地域で活動を行う学生のプロジェクトが盛んになっているのは、たいへん頼もしく、うれしいことだと思います。

この背景には、平成27年度から、全学の1年生全員が「茨城学」を必修科目として学んでおり、そのほかにもさまざまな「地域志向教育科目」の授業によって、地域の問題を学び、考えたり、地域へうかがったりする機会が増えていること、また、地域においても、自治体、市民などが地方創生、地域活性化に取り組む中で、学生を中心とした若い世代への期待が高まっていて、さまざまな課題について、学生たちとともに解決の方向を見出していきたいという働きかけを以前にまして、いただいていることがあげられます。

茨城大学では、平成28年12月に、本「学生地域参画プロジェクト」をはじめとして、授業、サークルや部活動、ボランティア活動などで、地域で活動している学生たちが全学から集まって活動発表や交流を行う「学生地域活動発表会 <はばたく！茨大生>」の第1回を開きましたが、学生どうしの交流に加え、自治体、企業、市民の方など、発表会においていただいた方々と学生たちが直接、お話しをする機会にもなり、学生たちに多くの励ましや示唆をいただきました。平成29年は12月13日に、「学生地域活動発表会 <はばたく！茨大生>」を開催し、今年もまた、今年度の活動に対する意見やアドバイス、激励をいただきましたし、学生たちに対して、今、こういうテーマがあるのだけれど、いっしょに活動しませんか、と呼びかけて下さる企業や自治体もありました。

茨城大学では、今後も、学生たちが自主的、主体的にテーマを選び、地域で活動を展開する学生プロジェクトをしっかりと支援していきたいと思っておりますし、上述のような、学生たちと協働したいテーマをお持ちの自治体、企業、市民のみならず、その課題に関心を持ち、ごいっしょに活動したいという学生たちの間をつなぎ、さまざまなサポートを行って参ります。どうぞ、引き続き、「学生地域参画プロジェクト」等の学生たちを応援いただけますよう、お願いいたします。

茨城大学社会連携センター副センター長、地域連携部門長  
西野 由希子（人文社会科学部教授）

# 地域活性ドローンプロジェクト

教育・研究

ボランティア

課外活動

地域交流

代表者：人文学部社会科学科 3年 正田 真悟

## 連携先

石岡市  
茨城県内で活動するイベント団体  
茨城県内の宿泊施設

## 顧問教員

百瀬 宗武（理学部・教授）

## 参加者

正田 真悟（人文学部社会科学科 3年）  
三瓶 克彦（人文学部社会科学科 3年）  
大畑 和樹（工学部知能システム工学科 1年）  
綿谷 直樹（工学部知能システム工学科 1年）  
塚原 裕太（工学部電気電子工学科 3年）  
鴨志田浩大（工学部知能システム工学科 1年）  
高橋 寛道（人文社会科学部現代社会学科 1年）  
高原 大輔（工学部機械工学科 1年）

## プロジェクトの概要

### ●プロジェクトのテーマと背景

このプロジェクトは、茨城大学航空技術研究会が主導となるものである。私たちは、日頃研究している航空技術の知識や技能を活かして、茨城県の地域活性化に貢献したいと考えている。

近年、ドローンの普及で空撮が身近なものとなりつつある。上空や人が立ち入れない場

所など、通常の視点とは異なる視点からの撮影が可能であり、大規模商業施設や観光地のPR動画に使われ始めている。しかし、未経験の個人が撮影する場合、法的な規制が多く、また操縦技術の熟練には時間がかかる。業者に頼むと費用も高額であるため、NPOや地域の小規模イベントなどにおいてはあまり活用できていない現状がある。

地域活性化や地方創生の流れの中、地域の観光に力を入れる動きは加速しているが、広報においては遅れをとっていると言わざるを得ない。

国土交通省航空局より飛行許可を特別に受け(既に来年5月までの許可を取得済み)、高い技術力・知識を有し、イベント時の空撮においても人員を多く確保できる我々がそれらの問題点を解決し、地域のイベントに先進的な広報手段であるドローン空撮を導入する。

### ●プロジェクトの目的

ドローンによる空撮を通して、地域社会に貢献する。

## プロジェクトの成果報告

### ●当初予定していた空撮事業に関して

今回プロジェクトにおいては、当初予定していた地域連携先（県内のイベント団体、宿泊施設など）と空撮を行うことはほとんど無かった。その主な理由は、天候不良とそれに伴うイベント自体の中止や撮影条件不良である。空撮においては精密機械であるドローン

を飛行させるため、雨や強風の際には航空法上、また安全上の観点から飛行させることが出来ない。そのため、イベント自体は開催されるコンディションであっても、飛行をすることが出来ないという状況も度々発生した。なお、予定していた事業が行われなかったため、採択された補助金についても全額未使用となった。この点について、次年度以降は更に多くの連携先を作り、当初予定が実行されないという事態を避けたいと考えている。

また、プロジェクトの目的である「ドローン空撮を通じた地域社会への貢献」を実現するため、実施前に予定されていた連携先以外との空撮も行った。インターネット上のHPにて、空撮依頼を受け付けた。

以下に、当初は予定されていなかったが、実行することとなった事業について記述する。

### ●市町村との災害時空撮協定の締結

近年、自然災害時における上空からの情報収集手段として、ドローンを活用する動きが高まっている。人が立ち入れない場所や危険な場所の情報収集が可能となり、迅速に災害に対処することができると期待されている。

2017年11月、私たち（航空技術研究会）は石岡市と、「災害時におけるドローンによる情報収集等に関する協定」を結んだ。この取り組みは、学内における学生団体が自治体と協定を結んだ初めての事例でもある。なお、この協定については翌日以降の新聞各紙（茨城、産経、朝日、読売、東京新聞）にも大きく取り上げられた。

### ●市町村公式観光PR動画制作への協力

石岡市の公式PR動画において使用する為の映像を撮影した。市町村のPR動画にドローンを活用する例は多くみられ、私たちは石岡市内の観光地である「茨城県フラワーパ

ーク」など複数箇所の空撮を行った。なお、動画は2018年中にも公開される予定である。

### ●反省と今後の展望

今回、地域社会貢献を目的とした様々な事業を行った。当初の空撮予定とは異なる形とはなったが、その目的は十分に果たされた。今後も、地域社会に貢献できるよう活動を継続していきたい。

課題としては、今後の活動継続のための人材育成があげられる。ドローンを活用した事業は、熟練した操縦者なしには成り立たない。今後も操縦者育成に励みたい。

### ●各種メディア等

#### ・新聞

茨城新聞、産経新聞、朝日新聞、読売新聞、東京新聞など(掲載日順)。このうち読売新聞については「常陸人」コーナーにて特集記事。

#### ・ラジオ

IBS茨城放送「ムービングなう」コーナーにてプロジェクトの広報を行った。

#### ・学内情報誌

iUP「THE茨大生」コーナーにて特集記事。



茨城新聞2017年11月14日より。

# まなびの輪 ～大洗における多文化共生～

教育・研究

ボランティア

課外活動

地域交流

国際交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 村上 柚香里

## 連携先

大洗町役場 まちづくり推進課  
大洗町立大洗小学校

ン学科 2年)

菊地 唯 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

倉持 ゆり (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

後藤 睦貴 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

沢 栞里 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

高田 美菜 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

吉田 風音 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

飛田宗一郎 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

## 顧問教員

横溝 環 (人文社会科学部・准教授)

## 参加者

木下絵美梨 (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)

飯塚子都香 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

井口 葵 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

稲見 知聡 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

大門 勇登 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

丸山 裕香 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

村上柚香里 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

村本沙織里 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

森井 美桜 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

渡邊 駿平 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

綿引 千晴 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

小栗 和花 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

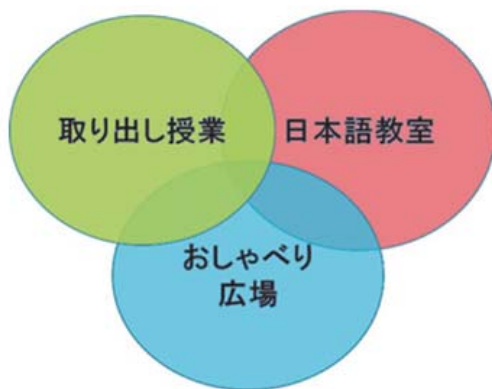
## プロジェクトの概要

本プロジェクトは、大洗町役場・大洗小学校・ボランティアの方々と連携し、大洗町在住外国人の日本語コミュニケーション能力の向上および多文化共生のまちづくりの推進を目的としている。

今年度は、これまでに引き続き、①大洗町在住外国人が日本語を学習できる場を設けること、②外国人同士・外国人と日本人の関係構築のきっかけとなる場を設けること、③外国にルーツを持つ子どもたちの学習をサポートすること、の3点を目標とした。加えて、④大洗町の事例を通して日本国内における国際化について多くの方々に知ってもらい、多文化共生への関心を促すこと、を新たな目標

とした。

活動内容は、大洗町在住外国人が日本語を学習できる「日本語教室」の開催、外国にルーツを持つ子どもの学習をサポートする「取り出し授業」への参加、日本語教室に参加したことがなくても気軽に参加できる「おしゃべり広場」の開催の3つを軸とする。今年度はこれらの活動に加えて、「外国人へのインタビュー」「大洗町民へのアンケート調査」「インタビュー・アンケートに基づく展示」を行なった。



## プロジェクトの成果報告

### (1) 日本語教室の開催

日本語教室は、外国人が日本語を学習できる場として、月に2回、第2・第4水曜日(18:30~20:00)に大洗町役場の会議室で開催している。学習者のニーズをもとに、個々の目標に沿った学習サポートを、地域の日本人ボランティアと共に実施している。

日本語教室では、日本人1人につき学習者1人~複数人の学習をサポートしている。担当者が変わる際、次回担当者へ学習内容の引き継ぎをする必要がある。そこで、今年度から、学習者1人1冊ノートを作り、日本語教室終了時に学習内容などを記録している。

継続して参加している学習者やボランティアから関係がひろがり、新たな外国人も参加するようになった。



日本語教室の様子

### (2) 取り出し授業への参加

大洗小学校では、外国にルーツを持つ子どもを対象に、日本語を補いながら教科学習をする「取り出し授業」が実施されている。

私たちは、前期週3日、後期週2日、取り出し授業に「日本語サポーター」として参加し、外国にルーツを持つ子どもの教科学習や日本語学習のサポートを行っている。

私たちが参加することで、児童一人ひとりがより密度の高い学習をすることができた。また、私たちの参加を楽しみにしている児童もあり、私たちの活動が、児童の学習に対するモチベーションを高めるきっかけとなったことも大きな成果といえる。

継続して参加することで、少しずつ児童や小学校の先生方との関係を築くことができた。

### (3) おしゃべり広場

気軽に参加でき、外国人同士や外国人と日本人の関係構築のきっかけとなるおしゃべり広場は、今年度は2回開催した。

1回目は、12月にクリスマスパーティーを開催し、子どもから大人まで参加できるゲームをした。また、外国人や日本人ボランティアが、自分で作った料理やお菓子を持ってきてくださった。





クリスマスパーティーの様子

2回目は、2月に開催した。参加者がそれぞれ音楽やダンスを披露したり、皆で簡単なダンスに挑戦したりした。参加者の発表を通して、普段の日本語教室などでは見られない新たな一面を知ることができた。また、初めて参加してくださる方もいた。その他にも、ジェスチャーゲームを行い、皆で楽しむことができた。



2月開催 おしゃべり広場

#### (4) 外国人へのインタビュー

普段日本語教室などに参加している外国人が、日本でどのような生活を送っているのか、また、日本での生活にどのような想いを抱いているのかを知るため、12月にインタビューを行った。インタビュー協力者は、普段日本語教室に参加している5名の外国人である。

インタビューを実施する前に、協力者にそれぞれの日常生活をビデオで撮影してもらい、

私たちはその映像を見てから、インタビューをした。

インタビューを通して、外国人の日本での日常や日本での生活に対する想い、どのように日本でコミュニティに入っていったのかなどを聞くことができた。



インタビューの様子

#### (5) 大洗町民へのアンケート調査

外国人へのインタビューを通して、外国人の日本での生活に対する想いを知った私たちは、日本人の声も聴いてみたいと感じた。そこで、大洗町に住む日本人が、大洗在住の外国人にどのような印象を持っているのかを知るために、12月にアンケート調査を実施した。スーパーの買い物客や商店街の店主など、計198名の協力者からアンケートの回答を得た。

その結果から、普段あいさつを交わす外国人がいる人は、外国人に対してポジティブな印象を抱いている人が多いということなどが分かった。

また、アンケート調査のなかで、町民の方々の実際の経験を直接伺うことができた。

#### (6) インタビュー・アンケートに基づく展示

上記のインタビューやアンケートから見えてきたことを紹介する展示を、茨城大学図書館展示室で2月1日から17日まで実施した。



展示の様子



展示のポスター

外国人の生活や日本での体験について知ってもらうため、インタビューやアンケートの結果に加えて、外国人の方々がこれまでに日本で撮影した写真を提供してもらい、展示した。

日本国内における国際化について多くの方々に知ってもらい、多文化共生について考えてもらいたい、という思いではじめた展示であったが、準備をするなかで、誰よりも私たち自身が、大洗に住む外国人や日本人、多

文化共生について考える機会となった。

#### (7) その他の活動

その他の活動として、大洗町の行事である八朔祭、盆踊りの夕べ、スポーツフェスティバルに参加し、食べ物を販売する手伝いなどをした。



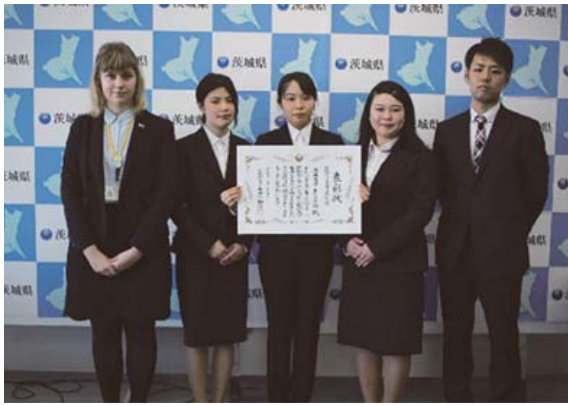
八朔祭の様子

また、日本語教室で活動するボランティア向けの講座を開催した。そこでは、日本語教室の運営についてボランティアと話し合った。

日本語教室に参加しているインドネシア出身の方に、彼らが通う教会のパーティーに招待されることもあった。外国人のコミュニティに迎え入れてもらい、普段私たちがみている姿とは違う、外国人のコミュニティのなかにいる姿をみることができた。

#### (8) 茨城県国際化推進奨励賞受賞

大洗町国際交流協会の推薦により、平成29年度茨城県国際化推進奨励賞を受賞することができた。表彰式に出席し、表彰状を頂いた。これまで携わってくださったすべての方々のおかげでここまで来ることができたと私たちは思っている。



表彰式の様子



表彰状

また、表彰式について、茨城新聞に取り上げて頂いた。

#### (9) 全体の成果と今後の課題

全体の成果として、第一に、これまでの活動にボランティアが継続して、積極的に参加してくださっている。私たちの活動は、将来的には大洗町住民が主体となって継続されることを目標としている。そのためにも、現段階で、私たちの活動に地域のボランティアが積極的に参加してくださることは、非常に大きな意味がある。今年度は、先述の通り、ボランティア向けの講座のなかで、日本語教室の運営についてディスカッションを行った。このディスカッションも、ボランティアと私たち、また、ボランティア同士の関係を深めることにつながったと考えられる。

第二に、インタビューやアンケート、それ

らに基づく展示をすることで、より多くの日本人に、大洗町における国際化について知ってもらい、多文化共生について考えてもらうきっかけをつくることができた。また、私たち自身が改めて大洗町の外国人や日本人、多文化共生について考える機会になった。

今後の課題として、日本語教室においては、学習内容引き継ぎのためのノートをより効果的に利用する方法を考え実施すること、日本語能力検定を受験する学習者が増えてきたため、私たちが対応できるようにすることが挙げられる。全体としては、今回のインタビュー・アンケート調査でみえてきたニーズに大洗町の外国人や日本人とともに応えていくことが挙げられる。

今後、大洗町の人々との関係を大切にしながら、継続して活動に励んでいきたい。

# 国連SDGs×イバラキ

教育・研究

地域交流

国際交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 小泉 咲綺

## 連携先

- ・つくば市役所
- ・Santi Sena
- ・持続可能な開発・みえ

## 顧問教員

野田 真里（人文社会科学部・准教授）

高瀬 日菜（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）

佐々木春奈（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）

杉原 莉紗（人文学部社会科学科 2年）

郡山 葵（人文社会科学部現代社会科学科 1年）

## 参加者

渡辺 悠（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）

千葉はづき（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）

飯島 千尋（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）

岩城 彩花（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）

菅原ありさ（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）

甲 香菜子（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

佐々木優夏（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

青柳 玲美（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

坂本 咲（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

佐藤 美穂（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

河野 愛加（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）

## プロジェクトの概要

### ●立ち上げの背景

顧問教員である野田先生の授業を受けてSDGsの重要性や認知度の低さを知ったメンバーが、自分たちの力でSDGsを広めようと考え2017年5月にプロジェクトを結成した。

### ●国連SDGsとは

SDGsは“Sustainable Development Goals”（持続可能な開発目標）の略称で、「エス・ディー・ジーズ」と読む。2015年9月の国連サミットで採択された2016年から2030年までの国際目標であり、持続可能な世界を実現するため17のゴール、169のターゲットから構成されている。現在では、日本でも多くの自治体や企業が注目し、SDGsに対する取り組みを進めている。

### ●活動の目的

以下の2つを目的として活動している。なお、今年度は目的①に重点を置いて活動することとしていた。

①参加メンバー自身がSDGsについての正確な知識を身に付け、SDGsを学内や地域に広められる人材となること。

②参加メンバーが主体となってSDGsを学内や地域にSDGsを広めること

### ●連携の方法・内容

顧問教員のもつネットワークを通じて各連携先に連携の依頼をした。随時メンバーが各連携先に出向いてプロジェクト運営についてのご助言やSDGsについてのご教授をいただいた。

## プロジェクトの成果報告

### ●今年度の活動

#### ①講演会・フィールドワークの実施

メンバーがSDGsについての理解を深めるため、様々な分野の専門家を招聘し講演会を行った。また、銚田市にて「持続可能な食と農」というテーマでフィールドワークを行った。これらの講演会、フィールドワークについては、メンバー以外の学生にも呼びかけ、一緒にSDGsについて学んだ。



フィールドワークでの訪問先  
JA茨城旭村 農業協同組合にて

講演会のテーマ：お越しいただいた先生)

・2017年5月24日

「プロスポーツによる地方創生」：サイバー  
デザイン茨城ロボッツ 山谷拓志代表

・2017年6月7日

“Globalization and Eco-Tourism:  
Sustainable Development in Myanmar”  
：MGET 藤村健夫代表



藤村先生と



藤村先生によるワークショップの様子

・2017年7月19日

「グローバル化と子育て・教育」：茨城県高  
等学校PTA連合会会長 鷺田美加様

・2017年10月31日

「持続可能な生産・消費とフェアトレード」  
：Kurata Pepper 倉田浩伸代表

- ・2017年11月1日  
 “SDGs and African Environmental Policy”  
 : Abe Initiative奨学生 Diallo Mamadu氏



Mamaduさんと

- ・2017年11月29日  
 「資本主義世界は持続可能か？ SDGsの核心とギマン」：森川文人弁護士
- ・2017年12月12日  
 「難民と人間の安全保障、日本における国際人権保障の実態のある側面」  
 : 駒井知会弁護士

## ②SDGsを広める活動

学内で開催された行事に参加し、SDGsを広める活動を行った。

- ・オープンキャンパス (2017年7月22日)



高校生に向けたSDGs紹介の様子



企画 “MY SDGs宣言”

高校生と保護者に向けて、SDGsの紹介をした。“MY SDGs宣言”という企画では紹介を聞いてくれた方に、SDGs達成のために自分で取り組みたいことを宣言してもらった。

- ・茨苑祭での出店 (2017年11月11・12日)  
 連携先であるSanti Sena (カンボジアのNGO) を通じてフェアトレードでストラップを入手し茨苑祭で販売した。売り上げは全額Santi Senaを通じて現地の女性と子供に寄付をした。出店に合わせてSDGsの紹介やプロジェクトの活動紹介なども行った。



出店の様子

- ・茨城国際会議（2017年11月18日）  
参加者に向けてSDGsやプロジェクトの活動について英語で発表した。



発表の様子

### ③プロジェクトの周知活動

Facebookページを作成しプロジェクトの活動報告や講演会の宣伝などを行った。また、オリジナルのロゴマークが入った缶バッジを作成し、活動に興味を持ってくれた人にお配りした。



オリジナルのロゴマーク

### ●プロジェクトの成果

プロジェクトの具体的な成果として、Facebookページのフォロワー数が100人となった（2018年2月9日現在）ことが挙げられる。また、活動に注目して頂きラジオにも出演させていただいた。（2017年12月30日12:00~12:15茨城放送ラジオ「青春インタビュームービングなう！」）



ラジオ出演の様子

メンバーによる活動の振り返りでは、目的①に応じた活動により、メンバー自身が必要知識を身につけることができ、たという意見が多くあった。また、活動を通して幅広い年代の多くの方と関わらせていただくことで、改めてSDGsの認知度の低さを感じることが出来たのも一つの成果である。合わせて、活動を通じて連携先以外の新たなネットワークを構築できたのも大きな成果であった。

### ●今後の展望

今後はSDGsを学内や学外に広める活動を積極的に行っていきたい。具体的には、SDGsについて地域の方々と学ぶ勉強会やワークショップなどをメンバーが主体となって開催できるようにしたいと考えている。

今後の課題としては、メンバーの確保が挙

げられる。メンバーには3・4年生が多いため、1・2年生を集めて活動が持続できるように努めたい。また、メンバーの多くが人文学部および人文社会科学部であることも課題である。SDGsは様々な分野から構成されるため、文系・理系を問わず多様な知識や考え方を持つ人材が必要となる。他学部のメンバーも集められるとより良いプロジェクトとなると考えている。



# 地方創成事業 里山フォレストフェス 地域ブランディングプロジェクト

ボランティア

地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 今野 香織

## 連携先

里山ホテルときわ路  
常陸太田市役所

## 顧問教員

小原 規宏（人文社会科学部・准教授）

## 参加者

今野 香織（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

大島 愛深（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

江口 雛乃（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

沢 葉里（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）

岡部 智里（理学部理学科 2年）

## プロジェクトの概要

### ●立ち上げの背景

本プロジェクトは、常陸太田市の里山環境について、あまり知られていないという現状を打破するため、自然環境の魅力発信に積極的な、常陸太田市にある里山ホテルときわ路と連携し、里山環境やその魅力を伝える活動を開始した。この活動を開始するにあたって、自然物を半永久的に保存し、見返すことで、自然資源の魅力に対する意識を高めようという考えから、自然物加工の方法が最も良いと判断した。従って、この工作体験で、常陸太田市の里山環境について学びながら、里山の

魅力を感じてもらうことを目的として立ち上げた。

### ●方法

- ①リーフキャンドル作り体験教室
- ②里山落ち葉レジンアクセサリ作り体験教室

目的の達成にあたって、以上2つの方法を取った。フォレストフェス内には、他の里山を体験するアクティビティもあった。（他のアクティビティに関しては、以下の写真を参照）それらと併せて、本プロジェクトの体験教室を行うことで、来場者が里山の魅力を発見する効果が高まると考えた。



里山フォレストフェスのチラシ

## プロジェクトの成果報告

里山フォレストフェスは、2017年9月9日（土）と9月10日（日）の2日間にわたって、常陸太田市の里山ホテルときわ路を会場として、開催された。広報活動の一環として、里山フォレストフェス開催前の8月26日

(土)には、茨城放送のラジオ番組に15分間出演し、本プロジェクトの宣伝・告知を行った。

#### ●9月9日(土)のプロジェクト内容

リーフキャンドル作り体験教室を行った。来場者に、会場内にある自然資源(落ち葉や木の皮)を拾ってもらい、拾ってきてもらった落ち葉を、キャンドルに張り付けていく。落ち葉が張り付いたら、剥がれ落ちないように、溶けた蠟の中に一度浸して、定着させる。出来上がったリーフキャンドルをラッピングして渡し、持って帰ってもらう。会場内には、手がかぶれる恐れのある漆の木があったため、その周辺区域には立ち入らないようにして、来場者の安全に配慮した。



リーフキャンドル作り体験教室の様子



完成したリーフキャンドル

#### ●9月10日(日)のプロジェクト内容

里山落ち葉レジンアクセサリー作り体験教室を行った。里山フォレストフェス内で行われたネイチャーツアーにおいて、インストラクターから来場者に会場内の自然環境の説明があった。その説明を基に、落ち葉や木の実を拾ってもらった。拾ってきてもらったものに、UVレジンを塗り付けてもらい、紫外線で硬化させる。硬化したものを、アクセサリー、キーホルダー、バッジにして持ち帰ってもらった。



レジンアクセサリー作り体験教室の様子



完成したレジンアクセサリー

#### プロジェクトの成果

今回の、会場内での自然資源を加工し、持ち帰るといった体験を通して、来場者が里山の魅力を発見することができたと考えられる。特に、体験者には子供が非常に多くいたため、この体験を通して、次の若い世代の里山の自然に対する意識を高め、発展させる一助と

なったのではないだろうか。里山フォレストフェス内での他のアクティビティと本プロジェクトの体験を合わせることで、より来場者に里山の自然の魅力を発信することができた。先述したネイチャーツアーとレジンアクセサリー作り体験教室を合わせることで、来場者は里山の自然資源に対する知識を得ることができ、加えて自然資源をレジンアクセサリーとして持ち帰ることで、里山の自然環境に対する理解を深めることができたと考える。また、里山フォレストフェスの来場者は、すべて親子連れだった。体験教室では、親子で協力して、一つのものを作り上げるといった様子が見られ、親子の触れあいの場を作り出すことができ、貴重な思い出づくりの場ともなった。外部からの評価としては、里山ホテルときわ路の取締役の方から、「親子で、自然に触れ合う場として、とても良い活動だったと思う。」というお言葉を頂いた。また、来場者の方からは、「落ち葉などを加工し、持って帰るのは、今までに経験がなく、とても楽しんで作ることができた。」という声を多くいただき、非常に充実したプロジェクトとなったと感じた。



親子で協力しリーフキャンドルを作る様子

## ●反省と今後の展望

本プロジェクトは初めての試みであり、準備段階から手探りの状況が多かった。準備に

かける時間や、体験に必要なもの等の部分で、十分な準備ができなかったことが反省点として挙げられる。当初の計画では、プロジェクト参加者で里山の自然環境や自然資源に関する紙芝居やパネル等を製作し、里山フォレストフェス来場者に説明をする予定だったが、準備時間の不足によりできなかった。今回は、ネイチャーツアーでインストラクターから来場者に会場内の自然環境の説明を行っていただいたが、次回はプロジェクト参加者が里山の自然環境に対する理解をより深め、準備時間を確保することによって、体験教室参加者に里山の自然環境や自然資源に関する説明ができるよう努力したい。また、里山フォレストフェスについての広報活動が不足していた点も反省点として挙げられる。茨城放送のラジオ出演は行ったが、SNSでの告知やチラシの配布等の基本的な広報活動をあまり行うことができなかった。これは、先述した準備時間の不足によるものだったが、里山ホテルときわ路と本プロジェクトの連携不足でも考えられる。次回は、連携先との連絡を密に取り合い、より大規模な広報活動を行っていききたい。

最後に、今後の展望として、本プロジェクトの最終目標は、常陸太田市の里山資源について多くの人々が知識を増やし、またそれにより地元のみならず、他の地域の人々も常陸太田市の里山の魅力を発見することである。加えて、この里山の魅力を活かした観光の発展により、常陸太田市の内部を盛り上げ、同市からの人口流失を防ぎ、過疎化の停滞の一助となれば、本プロジェクトの意義は非常に高まる。この最終目標の実現のためには、今回のような活動を継続的に行っていく必要があると考える。

# 茨大生×東北プロジェクト

## —茨大生と共にもう一度被災地へ、そして伝える活動—

ボランティア

地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 田島 彩花

### 連携先

石塚サントラベル株式会社

佐藤 綺音（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）

中橋 彩乃（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）

中三川瑞樹（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）

### 顧問教員

伊藤 哲司（人文学部人文コミュニケーション学科 教授）

西澤 秀朗（農学部食生命科学科 1年）

町田 天斗（農学部食生命科学科 1年）

三宅 彩（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）

### 参加者

飯塚子都香（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

岩崎 彩（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

高橋 佑奈（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

田島 彩花（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

吉田 彩乃（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）

大村みるほ（教育学部情報文化課程 2年）

鬼澤 麻美（人文学部社会科学科 2年）

河合 舞果（人文学部社会科学科 2年）

佐々木侑太（人文学部社会科学科 2年）

塩畑 見咲（人文学部社会科学科 2年）

鈴木 真由（人文学部社会科学科 2年）

石山 龍貴（人文学部社会科学科 2年）

高橋絵梨子（人文学部社会科学科 2年）

大川 日和（教育学部養護教諭養成課程 2年）

根本 知沙（教育学部学校教員養成課程（国語） 1年）

小島 彩華（教育学部学校教員養成課程（国語） 1年）

大井 真央（人文学部人文コミュニケーション学科 現代社会学科 1年）

### プロジェクトの概要

#### ●背景

このプロジェクトの母体であるサークル「茨大東北ボランティア＊Fleur＊」は2012年の創立以来、活動を続けてきた。その中でも、Fleurが企画・運営するボランティアバスは、活動の中心を成していた。しかし、関心の低下やバスの料金制度改正に伴う運賃の値上がりなどが影響をし、ボランティアバスへの参加者は減少した。そのため近年では、学生企画のボランティアバスの運行を行わず、石塚サントラベル(株)様の運行しているボランティアバスに同乗する形で活動を続けてきた。この形の活動では、Fleurのメンバーは震災後の街の現状を知ることができるが、「茨大生と被災地を繋げる」というモットーを果たすことが難しいと感じていた。

実際に被災地に訪れて頂くことにより、五

感を使って自ら知ること・感じることをできると考えた。

また、実際に訪れることができなくとも、手に取りやすい形で情報をまとめることで、少しでも被災地の状況を伝えることを目指した。

### ●目的

東日本大震災を語り継ぐこと

実際に訪れることにより、学生自身が考えること

被災地を訪れたくなるような働きかけをすること

### ●連携方法

本プロジェクトでは、東日本大震災直後から現在までボランティアバスを出し続ける、石塚サントラベル(株)様との連携を行っている。

具体的な連携方法としては、東北へのボランティアバスの運行、および活動に関する助言を頂いていることだ。私達の活動は、バスの運行なしでは活動を進めることはできない。学生企画のボランティアバスの運行協力のみならず、当サークルメンバーで行った岩手視察の際にもバスを運行して頂いた。その時訪れた場所については下記でふれるリーフレットにも記載されている。

### ●活動日程

茨大生×東北プロジェクトは、告知活動、\*Fleur\*宮城ボランティアバス2017、リーフレット作成の3つに大別される。

#### 告知活動

2017年11月13日(月)から11月28日(火)(土日や当サークル定例日を除く)にかけて、当企画である「\*Fleur\*宮城ボラバス2017」の告知活動を行った。

チラシを作成し、昼休みに水戸キャンパス

生協前にて学生向けに配布した。また、当サークル公式のTwitterでの呼びかけを行ったり、授業宣伝もさせて頂いたりした。

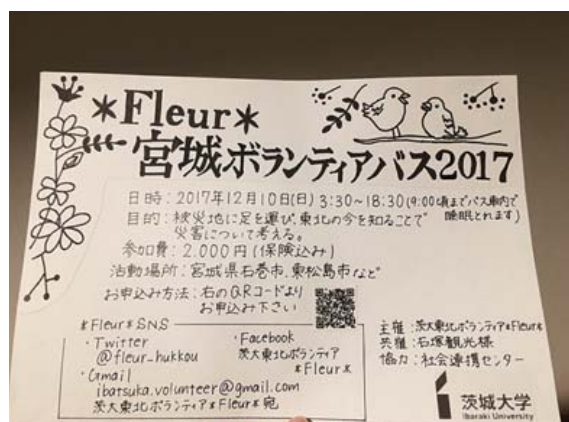


図1:実際に使用したチラシ

震災以降、東北に興味はあったものの、なかなか行けていなかった学生や学内のボランティアサークルに所属する学生など23名が集まり、当サークルメンバーを含む44名で運行することができた。

告知活動と並行して、日程や持ち物の他に訪問場所の紹介を掲載した、しおりを作成した。参加者には予め、メールにて、しおりをお送りし、被災地の状況の概要を理解して頂いた。

#### \*Fleur\*宮城ボランティアバス2017当日

当日は茨大前バス停に午前4時に集合し、石塚サントラベル(株)様に運行して頂くバスに乗って出発した。車内では、午前7時頃まで仮眠の時間とし、南相馬のパーキングエリアで休憩を取った後、震災で引き起こされた大津波の映像など当時の被災地の様子を鑑賞した。石塚サントラベル(株)の社長を務めておられる、綿引薫様も同乗して頂き、当時の被災地から現在に至るまでの変遷や防災の意識についてお話し頂いた。

午前9時頃、石巻にある大川小学校に到着した。そこは津波にのまれ、教員、児童の約

7割が犠牲となった場所である。慰霊碑に手を合わせた後、3時間ほど環境整備活動を行った。花壇の草刈りや花植え、また、砂利を取り除いて土を耕し新たな花壇も作った。

その後、石巻の道の駅である、上品の郷で休憩をとった。そこには、コンビニエンスストアや産直が入っており、ご当地の食べ物などは参加者の興味を惹き、お土産に購入する参加者もいた。



図2・3：大川小学校での作業の様子

午後には石巻の、南浜つなぐ館を訪れた。そこは、2015年11月に震災を伝承していく目的で建てられた施設であり、館内には震災前の街の様子を再現した復元模型などがある。そこで、当日の街の様子の説明を頂き、参加者からも質問が寄せられた。

その後、石巻周辺の街の様子をバスの中から視察した。参加者には感想を書いて頂き、水戸への帰路についた。

#### リーフレット『Fleur 東北紀行』の作成

今回の「\*Fleur \*宮城ボランティアバス2017」で訪れた場所を含み、当サークルでこれまで東北地域においては、福島県、宮城県、岩手県を訪れた経験がある。そこで、当サークルで訪れた場所について、地図や紹介文、写真を添えたリーフレットにまとめる取り組みを2018年1月から2月にかけて行った。このリーフレットは茨大生に向けて、

「被災地ことを知ってもらうこと」、「訪れてみたいと思ってもらうこと」を目的として作成した。リーフレットは2月中旬以降に刷りあがる予定である。



#### プロジェクトの成果報告

プロジェクトの成果として一番大きなものは、被災地を訪れた学生達が様々な考えを巡らせたことだ。百聞は一見にしかずと言われている通り、被災地の情報をどれだけ集めても、実際に自分でその地を訪れることにはかなわない。直接行き、見て、話を聞いて、感じたことは学生にとって大きな財産になる。ボランティアバスに参加した学生がどのような感じたのか、抜粋ではあるが紹介したい。

「初めて来た方に知ってもらうこと、聞いてもらうこと、顔を出すことが、被災者の方々にとって励ましになるのではないだろうか」

「綿引社長の、どん底は我慢して待てという言葉が心に残った。心の少しを大川小において来たので、それをまた取りにいきたい。」

「波が奪った多くの命を決して無駄にしないように、今後さらなる犠牲者を出さないように今、私たちが出来る対策を考え周囲に伝えることがどれだけ重要か学べた。」

「現地に行かなければ分からない多くのことを知ることができた。」

「自分たちができることは小さなことだが、  
 続けていくことが大事だと思った。」  
 「6年前の震災ではなく、今も続いている震災なのだ改めて考えることができた」  
 「いまの生活がいかに幸せか分かった。震災からかなり時間が経っているのにその爪痕が残っており、心が痛くなった。」

学生という、様々な物事を吸収し、考えることができる時期に、このような活動を共有できたことは、私たちFleurにとっても大きな成果であった

### 今後の展望

今回作成をしたリーフレット配布を計画している。茨城大学図書館や人文講義棟、理学部ラウンジにて置かせて頂くことや、兼ねてから当サークルと交流のある、「ふうあいねっと」様主催のイベントに際して、配布させて頂けるか交渉中である。



図4・5：リーフレット表紙・裏表紙

# 現場から学ぶ茨城学 ～畑で広げる地域の「わ」～

## 地域交流

代表者：人文学部社会科学科 2年 木村 愛実

### 連携先

- ・小田木保様
- ・水戸農業協同組合 菌部さとみ様
- ・NPO法人雇用人材協会/あしたの学校  
佐川雄太様
- ・株式会社青春畑きくち農園  
菊地章夫様
- ・常磐大学 松原哲哉准教授

### 顧問教員

社会連携センター 准教授  
清水恵美子（社会連携センター・准教授）

### 参加者

- 木村 愛実（人文学部社会科学科 2年）
- 小松崎流緋（人文学部社会科学科 2年）
- 加藤 駿（人文学部社会科学科 2年）
- 江口 紗姫（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）
- 福田 剛大（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）
- 山田 健介（理学部理学科 2年）
- 森田 翔央（農学部食生命科学科 1年）
- 浦本 匠（農学部食生命科学科 1年）
- 大川 千聡（農学部食生命科学科 1年）
- 河上 花琳（農学部食生命科学科 1年）
- 中根 佑人（農学部食生命科学科 1年）
- 山本 朝未（理学部理学科 1年）
- 豊田 健登（教育学部学校教育教員養成課程 1年）
- 橋本 花恵（教育学部学校教育教員養成課程

1年)

- 小塚 美穂（人文社会科学部現代社会学科 1年）
- 大畑 和樹（工学部知能システム工学科 1年）

### プロジェクトの概要

#### ●プロジェクトの背景

このプロジェクトは、農作業を通して地域と関わりたい、共に畑で何かを育てる感動を味わいたいという思いから昨年度発足した。

「茨城学」で学んだ耕作放棄地問題について実際に取り組み、そこから人の繋がりが生まれる可能性を感じた。昨年度は、耕作放棄地での再生活動及びイベントの開催、常磐大学松原哲哉先生のプロジェクト科目の活動に参加させていただいた他、あしたの学校から招待いただき地域活動団体の交流会「北関東三県団交流会」にて報告させていただいた。昨年度作った畑とコミュニティを継続するため、また茨城大学内にそれらを持ち込むために今年度も活動を行うことにした。

#### ●プロジェクトの内容や目的

本プロジェクトでは、耕作放棄地を再生させる過程を学生や地域の方々と共に経験し、それを契機にコミュニティをつくり、育てる取り組みを行う。

学生と地域の人々が一つの畑に集い、農作業を通して繋がりを深められる取り組みを行うことで、畑からネットワークを生み出し、



それを育てることを目指す。畑で生まれたネットワークが、学生と地域の双方が協力して地域を活性化させる活動を行うきっかけになることを目的とする。

目的を達成するための方法として、今年度は大きく3つの柱を立てた。

1つ目は耕作放棄地での活動である。昨年度作った畑を維持しつつ、まだ耕作放棄の状態に残してある部分を開拓していく。

2つ目は学内に畑を作る活動である。まずは茨苑食堂のテラスにプランターを設置し、ハーブや野菜等を育てるとともに、テラス席の外側の除草等を行う。

3つ目は他大学の学生との共同活動である。昨年度ご指導いただいた松原ゼミと、学外の畑で野菜を栽培する活動に参加し、農業を通じた地域活動について学ぶ。

## ●連携の方法・内容

耕作放棄地での活動に際しては、小田木様には昨年度から継続して畑を貸していただき、菊地様には昨年度から引き続き作業のご指導をいただいた。

常磐大学松原先生には、先生が担当するゼミの活動に参加させていただき、サツマイモの栽培を学んだ。

菌部様、佐川様には昨年度から引き続き活動を見守っていただき、ご助言をいただいた。

## ●活動日程等

### ①耕作放棄地での活動

6月には昨年度育てたタマネギやニンニクの収穫、耕作放棄地の雑草を刈りはらう「雑草討伐第二弾」を、新メンバーを交えて行った。また、菊地様のご指導のもと、多くの種類の夏野菜を植付けた。

10月には再び雑草を刈りはらったり畑の整備を行ったりし、11月の茨苑祭に向けてホウレンソウの植付けを行った。試作会も行

い、11月の茨苑祭では畑で収穫されたホウレンソウを使った手作りシフォンケーキを販売した。

### ②学内に畑を作る活動

茨苑食堂のテラスにプランターを設置したいと考えていたため、茨苑会館を拠点に活動する学生地域参画プロジェクト「日本一つながる学食プロジェクト」に対し、10月初めに合同企画の企画書を提出した。この後当プロジェクト内で再度企画の練り直しを行ったが、提案には至っていない。来年度の実現に向けて連携を強めていく。

### ③常磐大学松原ゼミとの活動

5月22日、常磐大学にて松原ゼミの皆さんとの顔合わせ・交流会を設けていただいた。6月5日には、実際にサツマイモを栽培する西ノ谷公園での瓦礫撤去作業、同月18日にはサツマイモ植えに参加させていただいた。

このほか、12月3日には昨年度も参加させていただいた常磐大学ファーム蕎麦収穫祭にもお招きいただいた。

### ④その他の活動

7月22日に行われた茨城大学オープンキャンパスでは、農学部宮口先生が顧問を務めるサークル、「楽農人」とブースをご一緒させていただき、活動紹介を行った。互いの活動についても知ることができ、交流ができた。

12月13日には、日本農業新聞様、JA水戸様に取材に来ていただいた。

## プロジェクトの成果報告

### ●プロジェクトの成果

#### ①耕作放棄地での活動

今年度は、作付けする作物の種類を大きく増やした。作った野菜は以下の12種類であ

る。

【キュウリ・カボチャ・トマト・ナス・オクラ・ピーマン・赤からし菜・ホウレンソウ・ベビーリーフ・春菊・エゴマ・ネギ】  
中にはうまく育成できなかつたものもあり、管理の難しさ、育成の難しさを学んだ。



畑での作業の様子

茨苑祭では、収穫したホウレンソウを使ってシフォンケーキを作った。2日間で合計200個作成し、各日1時間半ほどで完売した。これまでの活動で関わった方が多く買いに来てくださり、人の「わ」の広がりつつながりを実感した。耕作放棄地で作った作物を使ったものを販売したことで、より多くの方に活動を知ってもらい、耕作放棄地問題について知ってもらうきっかけになったのではないかなと思う。



茨苑祭販売ブース設営の様子

## ②学内に畑を作る活動

茨苑会館で活動をするということで学生地域参画プロジェクト「日本一つながる学食プロジェクト」との合同企画を考えていたが、一度企画書を提出しただけにとどまってしまった。プロジェクト内の連携不足と作業分担の偏り、チーム外との連携の弱さが改めて突き付けられた。来年度の合同企画実現に向けて、プロジェクト内外での連携を強めていく。

## ③常磐大学松原ゼミとの活動

交流会では、他大学で地域活動を行う団体がどのような活動をしているか、どのような課題を持っているか、どのような姿勢で地域と向き合うか、など、様々な情報や意見が交換できた。サツマイモ栽培では、農家の方の指導のもと技術を学ばせていただいた。



交流会の様子

「合同企画」を行うというお話をいただいていたが、こちらの力不足でお手伝いをさせていただく形にとどまってしまった。来年度こそ「合同企画」ができるよう、プロジェクトの運営を見直していきたい。

## ④その他の活動

オープンキャンパスで農学部のサークルである「楽農人」と活動させていただいたこと

で、同じ大学の中での他団体の活動を学ぶことができ、同じ農業というテーマで活動を行う学生同士「わ」を広げることができた。また、オープンキャンパスに来た高校生や保護者の方から学部を超えた活動に興味を持っていただくことができた。

メディアにも大きく取り上げていただき、より多くの方に活動を知ってもらうことができたのではないかと感じる。

【メディア掲載】

- ・JA水戸組合員向け広報誌「協同の心」2月号5面「耕作放棄地再生で地域交流を」
- ・日本農業新聞2018年1月29日発刊13面「耕作放棄地解消 連携が鍵」



日本農業新聞2018年1月29日発刊  
「耕作放棄地解消 連携が鍵」

●今後の課題

活動の柱として挙げていた、「日本一つながる学食プロジェクト」との合同企画として茨苑食堂前でプランター栽培を行う計画が進められなかった。また、常磐大学松原ゼミとの活動もお手伝いをするにとどまってしまった。プロジェクト内の意思疎通が取れなかったこと、作業分担が偏ってしまったことが原因として挙げられる。地域活動において他との連携は非常に重要なものになってくるため、プロジェクト内の動きが鈍ることで連携先に迷惑をかけてしまうのは言語道断である。今年度は組織体制の改革が中途半端になってしまったため、来年度は組織の運営の仕方から改善していく。

お借りしていた畑の近くで道路新設工事が始まったことや、プロジェクト内で通年の見通しが立てられなかったことから、畑での活動をイベント化できなかった。「畑に集うことでコミュニティを作る」という目的が達成されなかった。地域活動発表会や「茨城学」の授業前、茨苑祭やその他学内で行われたイベントなどで、耕作放棄地問題についての発信や我々の活動について紹介をし、会議に参加してもらったり耕作放棄地で育った野菜が使われたものを食べていただいたりしたが、「知る契機」だけでなく「集う場」を作れなかった。来年度はこれまでに引き続き、「集う場」の形成を目指す。

今年度の団体運営において、意思疎通が図れなかったり作業分担ができなかったり、人数が増えたことによる運営の難しさを学んだ。今後、「コミュニティを作る」という目的を達成し、かつそのコミュニティを維持させるために、継続する団体を作らなければならないと感じた。

●今後の展望

来年度こそ、学内に「集う場」をつくるた

めの足掛かりとして茨苑食堂前でのプランター栽培を実現させたい。この活動の中で「日本一つながる学食プロジェクト」とのコラボができるよう、今年度中から連携を強めていく。

常磐大学松原ゼミとの活動についても、「来年度こそ合同企画を」というお話をいただいているため、今年度の反省を活かしてこれを実現させたい。

この他にも耕作放棄地問題の周知活動を行い「知る契機」を提供することを継続したい。また、プロジェクト自体の運営の仕方を見直し、多方面との連携が可能な組織をつくりたい。

#### ●終わりに

今年度もたくさんの方々にお世話になりました。我々の活動が継続できるのは地域の方々、そしてこのプロジェクトに興味を持ってくださっている皆様のご支援、ご協力、ご指導のおかげです。厚く御礼申し上げます。

#### 【お世話になった方々】

- ・小田木保様
- ・水戸農業協同組合 菌部さとみ様
- ・NPO法人雇用人材協会/あしたの学校  
佐川雄太様
- ・株式会社青春畑きくち農園 菊地章夫様
- ・常磐大学 松原哲哉准教授
- ・常磐大学 プロジェクト科目履修生の皆さん
- ・茨城大学農学部 宮口右二教授
- ・楽農人の皆さん
- ・作業に参加して下さった皆さん

# 岡倉天心・五浦発信プロジェクト

## 課外活動

## 地域交流

代表者：人文学部 人文社会科学部 2年 長永 勇太  
人文学部 人文コミュニケーション学科 2年 丹治彩弥乃

## 連携先

株式会社 サザコーヒー  
店舗事業部 部長 砂押律生  
(株)五浦観光ホテル 別館 大観荘  
代表取締役社長 村田章  
北茨城市役所 環境産業部  
商工観光課 駒木根良徳  
茨城大学五浦美術文化研究所

## 顧問教員

茨城大学工学部都市システム工学科  
一ノ瀬 彩 (工学部・助教)

## 参加者

長永 勇太 (人文学部社会科学科 2年)  
小松崎流緋 (人文学部社会科学科 2年)  
木村 愛実 (人文学部社会科学科 2年)  
米川 緩 (人文学部社会科学科 2年)  
菊地 純 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)  
丹治彩弥乃 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)  
高矢 綾子 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)  
佐々木春菜 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)  
宮本 夢花 (人文社会科学部人間文化学科 1年)  
鈴木 楓子 (人文社会科学部現代社会学科 1年)  
田中 響 (理学部理学科 生物科学コース

1年)

友常 果歩 (筑波大学)  
鎌田 瑞希 (筑波大学)  
村田真之介

## プロジェクトの概要

茨城大学にゆかりのある、岡倉天心の思想や茨城県北茨城市五浦地域の魅力の発信を行い、本学の学生をはじめとした、多くの人々に岡倉天心や五浦について知ってもらうことを目的とする。そのために、多くの人々に天心の思想や五浦の文化に触れる機会、場所を提供する。方法として、本校の小泉晋弥教授や、清水恵美子教授に天心や五浦に残る歴史について学んだり、それらを活かした学生考案のWSや魅力発信商品の開発等があげられる。また、こういった活動を継続して行う。活動場所は茨城県北茨城市五浦地域を中心するが、WS等は移動しても行えるため、五浦以外の場所でも行っている。企画を学生が考案し製作する作業は大学で会議を行い進めている。連携先であるサザコーヒーとは五浦コーヒーという魅力発信商品の開発で深く関わらせていただき、五浦コーヒーの商品販売も学生が行い、商品を通して地域の魅力発信を行っている。

## プロジェクトの成果報告

### 【プロジェクトの成果】

学生参画による地域プロモーション活動として以下のことを行ってきた。

### 《地域懇談会》～五浦ならではの「おもてなし」をみんなで考える～

天心邸にて、地域参画による商品開発・プロモーションのアイデアワークショップや教員によるレクチャーを開催した。



「学生と地域の人とのレクチャーの様子」

### 《珈琲パフォーマンストレーニング》

プロモーション活動に向けて五浦コーヒーの美味しい淹れ方や知識をSAZAコーヒーのプロフェッショナルから学んだ。



「五浦コーヒーの淹れ方を教わる学生」

### 《珈琲茶席デモンストレーション》

天心邸にて、地元関係者を招いての珈琲茶席デモンストレーションを実施。学生によるパフォーマンスを披露し、活動のコンセプトを紹介した。

### 《珈琲茶席と珈琲画ワークショップによる五浦のおもてし活動》

天心邸にてSAZAコーヒー会長とのコラボレーション企画「珈琲茶席」を開催。庭では珈琲画体験企画を行った。絵を描くことで、天心が愛した風景を眺めながらゆったり時間を過してもらおう場をデザインした。



「珈琲茶席の様子」

### 《国際岡倉天心シンポジウム2016》

水戸で開催された国際シンポジウムにて、五浦コーヒーのお披露目と五浦をプロモーションする珈琲パフォーマンスを媒介として五浦や天心について来場者との対話の場をデザインした。

### 《天心生誕祭・五浦コーヒーのギフト提案》

天心の誕生日とバレンタインが同日であることから、茨大サザコーヒー店に五浦コーヒーと豆チョコのセットギフトを提案。学生作の天心のメッセージカードを添えた茨大店限定ギフトを販売。また茨城新聞にも取り上げられた。



「学生作天心メッセージカードを添えた茨大店限定ギフトと掲載された茨城新聞(2017年2月16日)」

### 《仲秋観月会》

天心が昔に行ったとされる観月会を再現し、五浦現地で学生手作りの屋台で珈琲画のWSを行った。あわせて五浦コーヒーの販売とパフォーマンスも行った。

### 《五浦コーヒー茨城デザインセレクション知事選定の受賞》



「手作りの屋台でWSを開催している様子」

茨城大学とサザコーヒーで共同開発した五浦コーヒーを茨城デザインセレクションへ学生の五浦魅力発信活動とともに応募し、知事選定を受賞した。これをきっかけに、ひたちなか市のファッションクルーズ内で行われたデザインセレクションイベントでも五浦コーヒーの販売とパフォーマンス、WSを行った。

### 《五浦写真展の開催》

茨大生をターゲットに、茨城大学図書館1階の展示室にて、五浦フォトジェニック、イ

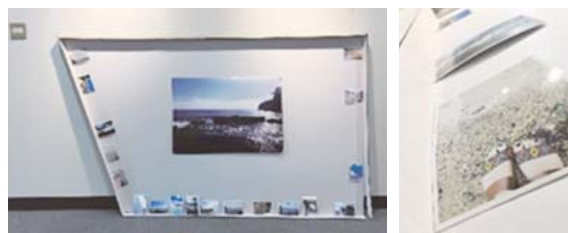


「地域魅力発信商品の五浦コーヒー」

ンスタ映えをテーマに五浦の魅力を詰めた写真展を開催した。展示には段ボールを使用したシンプルながら雰囲気のでるものを作り上げた。

### 《TEAISM便り》

活動紹介や五浦の魅力を発信するために、



「実際に学生が五浦現地で撮影した写真を展示した」

「天心からの便り」というコンセプトで作成した。五浦で感じたことをマップに書くことができたり、五浦コーヒーや天心についての情報も盛り込んでいる。天心からの便りのイメージをイラストやテキストで表した。

### 《珈琲を使った珈琲画ワークショップ》

珈琲を濃く溶いてインクにし、作成したコースター・紙袋・ハガキを選び五浦の景色



「原稿もすべて学生が手掛けたTEAISM便り」

を眺めながら自由にイラストや文字を描いてもらうWSを実施。WSを通して五浦をゆっくり眺め、対話を楽しむ。その時に描いた物は持ち帰ってもらい、五浦で過ごした時間を思い出すものとした。

りも少ないので、もっと地域と近く深く関わられるような企画を考案していきたい。

#### 《TEAISMのテキスト を用いて作成したオ



「珈琲をインクにイラストを描いたコースターとWSを行っている様子」

#### 【プロジェクトの今後の展望】

今後の展望としては、これまでの活動で外部の色々な方たちとのつながりをもてたので、さらに連携しながら、学生のアイデアや力を活かした、さらに魅力的な発信活動をしていきたいと思う。

#### リジナルグッズ》

Tシャツ、手ぬぐい、トートバッグ、SAZAコーヒーのユーズドのエプロンにシルクスクリーンでTEAISMのテキストや五浦コーヒーの文字、珈琲の判、大学のロゴを印字。TEAISMを発信するコミュニケーショングッズとして、WSや展示・パフォーマンスに活用。

#### 【プロジェクトの今後の課題】



「学生作成の発信グッズ」

今後の課題としてまず、情報発信をもっと活発に行えるようにしたい。企画ごとにチラシを作成してSNS上で発信したり、Twitterアカウントを利用し情報発信を行っているが、SNSをあまり利用しない人にも情報をもっと発信していくための方法を考えていきたいと思っている。具体的には、自分たちの活動を定期的に更新していくHPの作成等を考えている。

また、五浦地域の人たちとの直接的な関わ



# 西塩子の回り舞台茨大チーム

ボランティア

課外活動

地域交流

代表者：人文学部社会科学科 2年 長永 勇太

## 連携先

西塩子の回り舞台保存会（常陸大宮市）（会長 大貫孝夫、事務局 岡崎強）

## 顧問教員

西野由希子（人文社会科学部・教授）

## 参加者

小松崎流緋（人文学部 2年）

大貫ひかる（人文学部 2年）ほか

## プロジェクトの概要

- 常陸大宮市西塩子地区で、3年に1度開催される「西塩子の回り舞台」を支え、その魅力を若い世代に伝えることを目的としている。
- 平成28年の「西塩子の回り舞台」の組み立て、公演をお手伝いし、一度、中断したあとで復活したすばらしい舞台に感激した1年生2年生を中心にこの活動をたちあげた。地域の伝統文化を継承し、この文化の「語り部」を増やしたいと考えた。

## プロジェクトの成果報告

- 「西塩子の回り舞台」保存会が、組み立てのない年にも継続されている「回り舞台の里へようこそプロジェクト」に協力し、保存会と地区外から参加される方たちとの交流活動（田植え、稲刈り、味覚祭）に参加した。
- 「回り舞台の里へようこそプロジェクト」

の田植えでは、「早乙女」の衣装を着せてもらったが、その衣装を使って同じ常陸大宮市の山方（諸沢地区）で、「常陸大宮市地域おこし協力隊」が主催した「田んぼ88プロジェクト」の田植えが行われたので、そちらの活動にも参加した。

「西塩子の回り舞台保存会」は、諸沢地区で7年に1度開かれる「西金砂神社小祭礼」の前回の開催のときに協力をしている。両地区は、ともに貴重な伝統文化を伝えているが、地区の人口減少、高齢化という問題を抱えていて、地区どうしの交流、協力がはじまっている。今回もそのような機会に、茨大の学生も参加できたことに意味があったと思う。

- 次回の「回り舞台」組み立て・公演は、平成31年秋の予定なので、その組み立て・公演へ向けて、学生ができることを考えながら、協力・協働していきたい。



# 日本一つながる学食プロジェクト

## 地域交流

代表者：教育学部養護教諭養成課程 2年 梅津 尊子

### 連携先

- ・株式会社坂東太郎
- ・茨城県天心記念五浦美術館

### 顧問教員

清水 恵美子（社会連携センター・准教授）

### 参加者

川原涼太郎（工学部機械工学科 3年）  
新井ひな乃（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）  
石津 彰理（人文学部社会科学科 2年）  
鐘下 航平（人文学部社会科学科 2年）  
佐久間 瑠（人文学部社会科学科 2年）  
千葉 綾馬（人文学部社会科学科 2年）  
梅津 尊子（教育学部養護教諭養成課程 2年）  
伊藤 真帆（教育学部情報文化課程 2年）  
大村みるほ（教育学部情報文化課程 2年）  
野原緋奈子（教育学部情報文化課程 2年）  
花崎 諒（工学部情報工学科 1年）  
中島 千尋（教育学部養護教諭養成課程 1年）

### プロジェクトの概要

当プロジェクトは、茨苑レストランが「日本一つながる学食」になることを目指して株式会社坂東太郎（以下坂東太郎）と連携し、週2回の会議を通じ意見を交換しながら目標の具現化を一步步進めている。平成27年10月に、茨苑会館内にある学生食堂をリ

ニューアルすることを目的とし発足。平成28年9月、学生の意見が取り入れられた「茨苑レストラン」としてリニューアルオープンを果たした。その後は新メニュー開発やイベントの開催、企業連携などを中心に学生や地域と密に関わっている。当プロジェクトは、食を通じて地域や人とのつながりを学び、成長できる、「食と学びの日本一」をメインテーマとし、それに付随して「感じる、飛び出す、好きになる」をサブテーマとしている。これは茨苑食堂で提供される食材や物、企画を通じて、それに興味をもった人が実際に生産の場に行ったり地域の方と関わったりしていくことで、茨城という土地を理解し愛着を持ってもらおうというものである。私たちは、学生と地域・企業がお互いに且つ自主的に関わり合うようになれば茨城大学の地域との連携力が学生自身の手によって向上し、学生自身の社会力も向上すると考える。当プロジェクトは、茨苑食堂を様々な人が気軽に立ち寄れる場所にすることで、人と情報が集まりそれぞれが繋がる場に、食堂を利用する人が受け身ではなく自主的に地域に参画できるようになることを目標としている。

### プロジェクトの成果報告

#### ●メニュー開発

今年度は4度の期間限定メニューの開発をおこなった。開発の方法としては、定期的に回収しているアンケートの結果を基に進める形や、日本一つながる学食プロジェクト（以

下つな食) メンバーからの意見を基に進める形等があげられる。以下販売した順に示していく。

今年度初めのメニュー開発では新歓も兼ね、つな食メンバー以外も参加する試食会を2度開催した。その中で、茨苑食堂で最も人気のある『からあげ定食』の量が女性には多いため、「女性も食べやすい唐揚げメニューが欲しい」という意見を基に「からたま黒酢丼(唐揚げに玉ねぎを黒酢で和えたソースをかけた丼)」を開発した。この商品は6月1日から7月5日まで販売し、477食売り上げた。利用者からは「また販売してほしい」という声が多く聞かれ、今後も人気メニューを気軽に楽しめるような開発が必要であると感じている。次に、茨城県が生産量一位である「メロン」を使用したクレープを夏メニューとして開発した。7月10日から8月10日までの期間で153食売り上げたが、長期休業前ということもあり利用者が少なく、販売期間を短くした方がよいという意見があった。後期に入ってから、冬メニューとして「つな食サンのあったかプレート」を開発した。このメニューは、夏休みに行った他大学の学食見学で食したメニューを参考にした。内容は「クリームシチュー、チキンソテー、ご飯orパン、りゅうなんしえ」。つな食としては初のセットメニューであり、和食が多い食堂内で洋食は珍しく、チャレンジした部分が多いメニューだった。そのため、試作が難航したが、坂東太郎の方々のご尽力により販売に至った。結果的には、パンを主食として選択できたことが作用し、12月1日から12月22日までで160食を売り上げた。そして、2月1日から2月14日までのバレンタインメニューとして、昨年販売した「恋くれープ」を基盤に「大人の恋くれープ」を開発した。昨年同様、茨城県産の苺「いばらキッス」を使用。坂東太郎の方々アドバイスのにより、

生地をココア生地にしたたりトッピングにミントを使用したりすることで、昨年度よりもパワーアップした商品を目指した。販売期間はテスト期間中にも関わらず、連日売り切れになるほどの人気を博した。一方で、今年度は恋くれープを大きく成長させることができたが、同時に来年度以降の恋くれープの成長も難しくなったのではないかとの意見もある。



メロメロクレープ



つな食サンのあったかプレート

## ●企画

当プロジェクトの目標である、学生と地域がつながるといふ部分に対し、「つながる企画」として進めている。今年度は、茨城県天心記念五浦美術館(以下美術館)の開館20周年記念「龍を描く」展の商品を開発するお話をいただき、学生の意見を取り入れていただきつつ坂東太郎とコラボレーションした。

「龍を描く」にかけ、商品名を「りゅうなんしえ」とし、岡倉天心の「茶の本」から着想を得て茨城県産のお茶の葉を使用した商品を5個入り1箱で開発。パッケージや、箱に入れるカード、さらにポスターのデザインと文面の作成を学生が担当し、坂東太郎・美術館・茨城大学の皆様からのご意見を基に完成させた。「龍を描く」の開催期間である10月25日から11月26日まで美術館にて販売した。会期中にはメンバーが美術館を訪問し宣伝させていただいた。また、会期後は茨苑レ

レストランにて販売し、「つな食サンタのあったかプレート」のデザートとしても使用した。12月22日で販売終了とし、計1516個（うち箱売り282箱）売り上げた。りゅうなんしえは各方面で紹介していただき、つな食を多くの方々に知っていただく機会となった。また、美術館との繋がりを生み出すことができたとともに、様々な団体の思いを一つの形にすることについて学ぶことができた。

12月1日にはつな食初のイベントとして、クリスマス企画を開催した。学内の音楽サークルやパフォーマンスサークルに協力を要請し、3団体から協力を得ることができた。茨苑レストランのスタッフの皆様にもオードブルを用意していただくなど、お力添えいただいた。来場者からは会費を徴収する形をとったが、集客が非常に難しかった。各参加団体の発表は素晴らしく、良い会となったが、課題も多く残ることとなった。しかし、学内サークルとの繋がりを作ることができたことや、来場者のほとんどが「また来たい」と答えていることから、今後への希望が伺える。今回の反省を今後のイベント開催に繋げていきたい。

今年度は、大学内外どちらともつながりを生み出す企画を行うことができた。今後はそのつながりを途絶えさせることなく、それぞれが繋がる場として茨苑レストランが機能していくことができるよう活動していく。また、他プロジェクトとのコラボレーションの話も出ているため、来年度以降進めていきたい。さらに、夏休みには青山学院大学17号館の学食「イチナナ」と東京学芸大学図書館のカフェ「note cafe」を見学させていただいた。どちらも茨苑レストランにはない要素があった。イチナナのセットメニューに着想を得て冬メニューのセットを開発したり、note cafeの学生が自由に記入できるノートから、茨苑祭では来場者に自由に記入してもらえ

コーナーを作ったりした。他大学の学食を見学させていただくことは非常に参考になることが多く、今後も様々なところを訪問させていただき、茨城大学に合った形で取り入れていきたいと思う。



パリゅうなんしえ  
←



クリスマス企画  
←

### ●広報

今年度は以前よりも広報に力を入れることができた。各メニュー、企画ごとにポスター掲示やビラ配布をし、FacebookやTwitterといったSNSを利用した広報も活発に行った。さらに、茨苑レストラン前に黒板を設置し、メニュー・企画の宣伝とともに、つな食の日頃の活動についての紹介も行っている。これらはメニューや企画だけではなく、プロジェクトや食堂自体の周知にもつながったと考えている。2月からは大学周辺の店舗にもポスターを掲示していただけるよう要請している。好意的に受け入れて下さる店舗が多く、学外の方への広報にさらに力を入れていくための自信へつながっている。また、学内行事にも積極的に参加した。新歓祭での活動紹介、オープンキャンパスでのかき氷の販売、茨苑祭での展示と活動紹介を通して、学内の方は勿論、学生の保護者や高校生への広報に努め

た。今年度は三村学長にも活動を紹介させていただき機会を設けていただき、今後の活動に向けた自信に大いにつながった。さらに、つな食には「つなこる」というキャラクターが存在し、広報に活用している。多くの方々から好評をいただいているため、今後もより積極的な活用方法を探っていく。

観るなび↓



活動紹介ボード



茨苑祭での発表

このようにメディアに取り上げていただけるのは、地域の方にも足を運んでいただくきっかけとなる。地域との繋がりをさらに生み出し、学生たちと繋げることができるよう活動していきたい。

●各メディア

以下紹介していただいたメディア。

- ・茨城新聞 地域欄
- ・公益社団法人日本観光振興協会 全国地域観光情報センター全国観るなび
- ・公益財団法人日本ナショナルトラスト メールマガジン第一号



茨城新聞 地域欄  
(平成29年11月22日)  
←

# 大洗応援隊！ ～OPEN OARAI もっと大洗を身近に～

ボランティア

地域交流

代表者：理学部理学科 2年 青山 実樹

## 連携先

髭釜商店会、大洗商店街活性化委員会、大洗町商工会、大洗町役場まちづくり推進課、商工観光課

## 顧問教員

伊藤 哲司（人文社会科学部・教授）

## 参加者

青山 実樹（理学部理学科 2年）  
細川 顕大（工学部知能システム工学科 2年）  
小沼 里沙（理学部理学科 4年）  
星野 春奈（理学部理学科 4年）  
松田 健佑（人文学部社会科学科 4年）  
鈴木 奈々（農学部地域環境科学科 3年）  
今村 祐哉（人文学部社会科学科 3年）  
大貫ひかる（人文学部社会科学科 2年）  
小野寺 哲（工学部電気電子工学科 2年）  
村岡 早紀（人文学部社会科学科 2年）

## プロジェクトの概要

大洗応援隊！は2012年より大洗町の髭釜商店街で「ほげほげカフェ」を隔週土曜日に運営してきた。これまでの成果に、カフェの認知度が徐々に上がっている、イベントの開催や情報発信を定期的に行っている等がある。昨年度は、商店街マップの改訂、商店街ジオラマ作成により、カフェに来られたお客様に商店街の情報をわかりやすく伝えた。今年度はさらに、「大洗の交流の輪を広げる」を

テーマとして3つの目標を設定した。

1つ目は、イベントの強化である。カフェのお客様に随時意見を聞き、イベント開催をする。イベントを開催することで、ほげほげカフェを身近に感じてもらうことを期待する。

2つ目は、商店街の認知度の向上である。大洗町の4商店街のマップを作成していたが、昨年度地域の方から、新道商店街を加えてほしいという要望を頂いた。そこで、新道商店街を加えた5商店街のマップを作成する。大洗町の5商店街を観光客の方に知ってもらうことを期待する。

3つ目は、フリーペーパーの作成である。大洗町は観光の町であり、多くの観光客の方が来ている。そこで、地域と学生の二者の関係だけでなく、地域と観光客と学生という三者の繋がりを強化するためにフリーペーパーの創刊号を発行する。地域や観光客の方に対して、相互の大洗町に関する思いを大洗応援隊！（学生）が媒体となって伝えることで、観光客の方に地域や大洗応援隊をより身近に感じてもらうことを期待する。

本プロジェクトを通して、大洗の魅力を多くの人に伝え、「大洗の活性化」を目指す。カフェを地域住民・観光客・学生の交流の拠点として機能させ、交流の輪を広げていく。また、互いがもつ強みや専門性、アイデアを融合して魅力的なイベントを作り出していく。その過程で自分たちの人間力を成長させる。将来的に「大洗応援隊！」が、地域と大学が共に学び創造する場（エリアキャンパ

ス) のモデルケースとなることをプロジェクト実施における最終的な目標とする。

### ●活動日程

7月	1日	ほげほげカフェ運営 茨城昔話の会開催
	15日	ほげほげカフェ運営
8月	19日	八朔祭りでのほげほげカフェ運営・うちわの配布・フリーペーパー作成のためのアンケート収集
	15・16日	他の大学生ボランティア団体と合宿
		大洗商店街マップのための情報収集
		茨城大学学生広報誌C-mail取材
9月	9日	ほげほげカフェ運営 茨城昔話の会開催
	23日	ほげほげカフェ運営
		大洗商店街マップ・フリーペーパーのための情報収集
10月	7日	ほげほげカフェ運営
	21日	ほげほげカフェ運営
		大洗商店街マップ・フリーペーパーのための情報収集 音楽祭ほげFes企画と出演者募集
11月	3日	音楽祭ほげFes ほげほげカフェ運営

	19日	あんこう祭りでの ほげほげカフェ運営
	11・12日	茨城祭ポスター展示
		大洗商店街マップ・フリーペーパーの作成
12月	10日	ほげほげカフェ運営 茨城昔話の会開催
	16日	ほげほげカフェ運営 クリスマス企画 水戸市内高校生に対し、 大洗応援隊の紹介
	13日	茨城大学学生地域活動発表会2017〈はばたく! 茨大生〉でのポスター発表
		大洗商店街マップ・フリーペーパーの作成
1月	13日	ほげほげカフェ運営 茨城昔話の会開催
		大洗商店街マップ・フリーペーパーの印刷

### プロジェクトの成果報告

#### ●カフェ運営

大洗町髭釜商店街の空き店舗を活用した「ほげほげカフェ」を月2回程度運営した。運営日は基本土曜日だが、大洗町でイベントがある月はその日程に合うよう調整した。雨天時に雨宿りとして利用して頂けるようにカフェ運営終了後もカフェを解放したり、大洗町でのイベント終了後休憩できるようにカフェの閉店時間を調整したり、少しでも多くの方にゆっくりと休んで頂ける工夫をした。その結果、ゆっくり心ゆくまで休める空間という面を重視して、運営することができた。

カフェ内に自由に絵やコメントが描ける模造紙やノートを設置し、多くの方に描いていただいた。

今後も「10年続くカフェ」を目指し、ほげほげカフェ運営を続けていきたい。



カフェ運営の様子

### ●イベントの開催

月1回程度、地域の方に茨城昔話の会開催をして頂いた。また、クリスマスには、クリスマス企画としてデコレーションしたマシュマロのプレゼントや、ミルクティーの販売等を行った。

11月3日に、大洗応援隊！主催で、ほげFesという音楽イベントを開催した。SNS、ほげほげカフェ、茨城大学等で宣伝したところ、8組の演奏者に参加して頂くことができた。30人程のお客様が観て下さった。「手作りの良いイベントだった」「また今後もほげほげカフェに来たい」といったコメントを多く頂いた。

今年度イベントの数をもう少し増やす予定だったが、増やすことができなかった。しかし、イベントの開催に関して、メンバー内外で様々な意見を出し合うことはできた。今後学生とカフェのお客様で作っていきけるような小規模なイベントを増やしていきたいと考えている。例えば、トランプや囲碁を使用したゲーム企画ができないか等、実際にほげほげカフェ内でお客様や運営メンバーでやりながら、模索しているところだ。

### ●商店街マップの作成

大洗応援隊！では、髭釜商店街、曲がり松商店街、大貫商店街、永町商店街の4商店街の情報を掲載した大洗ほげほげマップを2014年に作成し、毎年改訂作業をしている。今年度は、新道商店街を追加し、マップの大幅な改訂を行った。

昨年度のマップに掲載した4商店街の店舗を再びまわり、昨年度からの変更点がないか等情報収集を行った。また、新たに新道商店街のお店に伺い、マップに掲載可能かの確認、お店の特徴に関するインタビュー、店舗写真の撮影等を行った。これらの情報をまとめ、マップの改訂を行った。

ほげほげマップでは、102店舗の情報を掲載することができた。500部印刷し、ほげほげカフェ等に置いた。

今後、商店街を訪れた観光客や大洗町の方への配布、SNS上での紹介をしたいと考えている。



ほげほげマップ 表



ほげほげマップ 裏



## ●商店街フリーペーパーの作成

「ほげほげだより」というタイトルのフリーペーパーを作成した。SNSを見てくださった方やほげほげカフェに来て頂いたお客様など50人以上の方からアンケートに回答して頂いた。アンケート結果は、表紙の写真の決定、「観光客の皆様からの声」の掲載などに利用した。また、商店街をまわりながら多くの方にインタビューをした。それを基に、実際に大洗応援隊メンバーが商店街を「歩いて発見」したことを掲載した。

観光客、商店街など多くの方々にフリーペーパーに関するアドバイスを頂きながら作成した。アドバイスを頂いたことにより、当初の予定と変わった部分もあったが、より良い大洗町を紹介する冊子を作成できた。また、茨城大学の他のサークルとも協力することで、大洗応援隊！のみでは得られなかった情報も掲載できた。

「ほげほげだより」は250部印刷し、ほげほげカフェ等に置いた。

今後、商店街を訪れた観光客の方へ配布していきたいと考えている。また、大洗町の商店街を訪れる機会のない人へも興味を持ってもらえるよう、工夫して配布できたら良いと考えている。



ほげほげだより 表紙

## ●学生メンバー人手不足の解消

今年度は、茨城大学の他サークルや商店街の方々、ほげほげカフェのお客様と協力しながら、しっかりと運営していくことができた。また、茨城大学の他のサークルなど、多くの繋がりをつくることができた。今後も、協力し合いながら、しっかりと運営していきたい。

広報としては、茨城大学学生広報誌C-mail 2017年春/夏号に、大洗応援隊！に関する記事を掲載して頂いた。また、茨城大学共通教育棟や人文学部棟などでのポスター掲示や、茨苑祭でのポスター掲示をした。

今年度1年生に参加してもらうことができなかったため、人手不足の解消は課題として続いている。今後、茨城大学新歓祭への参加や、茨城学内での授業前告知等を予定している。これらのことから、人手不足を解消していきたいと考えている。

# 茨大聞き書き隊Notes

課外活動

地域交流

代表者：工学部機械工学科 3年 川原涼太郎

## 連携先

1.

団体名：常総市教育研究会防災教育委員会

職名・氏名：防災教育委員会委員長  
山口道夫

2.

団体名：NPO法人GIS総合研究所茨城

職名・氏名：代表理事 安原一哉

3.

団体名：常総市教育委員会学校教育課

職名・氏名：課長 吉山貴司

4.

団体名：国土交通省関東地方整備局下館河川  
事務所

職名・氏名：調査課長 星尾日明

## 顧問教員

伊藤 哲司（人文社会科学部・教授）

## 参加者

- ・川原涼太郎（工学部機械工学科 3年）
- ・石津 彰理（人文学部社会科学地域研究・社会学コース 2年）
- ・外間 花怜（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）
- ・岩崎 彩（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）
- ・山口紗奈子（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）
- ・飯塚子都香（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

・鈴木 真由（人文学部社会科学科 2年）

・アリマ （人文学部文化科学科  
院1年）

・鬼澤 麻美（人文学部社会科学科 2年）

・袖山 良美（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）

## プロジェクトの概要

2015年に発生した常総水害について、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所や、常総市教育委員会の協力のもと、その被災内容と被災者の方の体験を聞き取り冊子としてまとめ記録していくことを主な目的として活動している。また、常総水害の経験をこれからの世代を担う小中学生に対し、防災教育として伝えていく活動も昨年引き続き形で行っている。

### ●冊子発行について

茨大聞き書き隊Notesでは昨年度に聞き書き冊子の初版を作成しており、今年度作成した第二版では昨年度作成した冊子の内容を更改し、常総水害の現場がどのようなものであったかをより効果的に伝える内容とした。

主な内容としては、水害で被災された方の聞き書き記録、水害の発生時における浸水領域、聞き書き内容から推測される地域別の水害の進行状況、常総市内の小中学校にて実施した「防災ゲームクロスロード」などである。

### ●防災教育活動について

今年度も昨年度に引き続き、9月1日の防災の日に行われる常総市内一斉防災訓練にお

いて、常総市内の小中学校にて防災教育活動を行った。

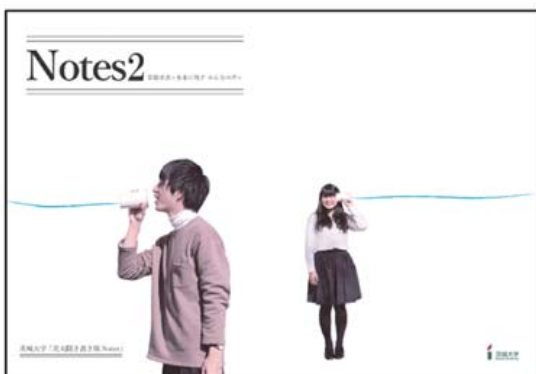
今年度はNotesだけでなく市内の小中学校を筑波大学・下館河川事務所で分担して活動をした。また、今年度の防災教育活動にあたり、Notes以外から約10名（理学部・人文学部・教育学部）の協力者を募り行った。

茨大聞き書き隊Notesは昨年度と同様に「防災ゲームクロスロード」を行ったが、今回同日に活動した筑波大学や下館河川事務所は「マイタイムラインプロジェクト」をベースとして展開しており、多方面から防災教育活動を施すことができた。

## プロジェクトの成果報告

### ●冊子発行について

今年度作成した第二版については約300部の発行をし、初版及び第二版の製作に関してご協力いただいた方々の他、全国の国土交通省全地方整備局、関東地方の全河川事務所、常総市内の全小中高等学校、常総市周辺地域の私立中学高等学校、茨城県南地域及び茨城県内の公立や大学の主要図書館に対して約200部分を送付していく。図1・2に第二版のページ例を示す。



【図1 第二版ページ例（表紙・裏表紙）】



【図2 第二版ページ例（経緯・浸水域）】

今回我々が作成した記録冊子は、これまでの茨城大学の水害調査団や国土地理院や内閣府の水害に関する記録と比較して、より被災した方々の生の声と発災時に人々がどういった行動をとるのかについてより詳細にまとめられたものとなっている。我々Notesの活動は今年度の第二版作成で一つの区切りはつくが、聞き書き冊子を全国各地に送付し冊子が各地で活用されることで、常総市の水害を常総市だけの教訓で終わらせないための礎になると考えている。

### ●防災教育活動について

今年度のNotesとしての防災教育活動は常総市内の絹西小学校、五箇小学校、菅原小学校、豊岡小学校、菅生小学校、岡田小学校、玉小学校、飯沼小学校、水海道西中学校の9つの小中学校にて行った。

今年度活動を行った上記の小中学校の中には、一昨年の水害において直接の被害を被ったものは少なかったこともあり、児童・生徒の中には一昨年の経験や記憶が薄くなっている人もいた。しかしその中でも、クロスロードゲームを児童と向き合いながら進めていく過程で皆が自分事として「水害の一場面でどう行動するか」を考えていくことができた。



地元で起きた災害であっても、丸二年がたったことにより記憶が薄くなってしまふ事から、今回我々が彼らのもとに出向き防災教育を施せたことは、現場の教職員の方々からも高い評価をいただいた。

今年度実施した防災教育活動の一部様子を



### ●今年度の活動全体について

今年度一年間の活動の中でNHK水戸放送局のラジオに二度出演することができた。常総市での水害がメディアでとりあげられる件数は減少していることから、水戸放送局からお声がけいただいたことは大変に大きかった。

今年度の活動を通して常総市内の小中学生には継続的に防災養育を施すことができた。しかし防災教育の本質としては未だ災害が起きていない地域にこそ、防災教育を施していくべきであることから、常総市内だけでなく茨城県内や関東地方の水害の危険性があげられる地域にも展開していくことが今後の課題であると考えられる。



図3,4,5にて示す。

- 【図3 水海道西中学校での様子】
- 【図4 飯沼小学校での様子】
- 【図5 岡田小学校での様子】

# 県北空き家再生プロジェクト

課外活動

地域交流

代表者：工学部都市システム工学科 3年 鎌田 吉紀

## 顧問教員

熊澤 貴之（工学部・准教授）

1年）

・加藤 桃佳（工学部都市システム工学科  
1年）

## 参加者

- ・鎌田 吉紀（工学部都市システム工学科 3年）
- ・草間 裕介（工学部都市システム工学科 3年）
- ・中根 央喜（工学部都市システム工学科 3年）
- ・斎藤 司（工学部都市システム工学科 3年）
- ・長谷川広樹（工学部都市システム工学科 3年）
- ・平野 史也（工学部都市システム工学科 3年）
- ・溝尾 拓馬（工学部都市システム工学科 3年）
- ・有住 竜一（工学部都市システム工学科 3年）
- ・飯塚 柊斗（工学部都市システム工学科 2年）
- ・徳元 秀平（工学部都市システム工学科 2年）
- ・竹内 美玖（工学部都市システム工学科 2年）
- ・工藤みちる（工学部都市システム工学科 2年）
- ・真保 琢海（工学部都市システム工学科 2年）
- ・千田 七海（工学部都市システム工学科

## プロジェクトの概要

当プロジェクトは、茨城県日立市にある空き家を、大学生と地域間の交流を目的とした場所に再生し、地域の空き家問題を解決するモデルケースとすることを目標とするプロジェクトである。

## プロジェクトの成果報告

当初のプランとしては、宿泊者が利用するゲストハウスを考案していた。ゲストハウスの内容としては、交流所を設け、宿泊者と交流所を訪れる人が持ち寄りの本を用いて交流できるような場を提案し、実践しようとした。しかし、運営や金銭面からゲストハウスではなく、安定した家賃収入が得られるシェアハ

空き家チェックリスト NO. \_\_\_\_\_ 作成者 \_\_\_\_\_

何層建てか	階建て
庭があるか	小1-2-3-4-5大
庭があるか	ある ない
空き家の状態	悪1-2-3-4-5良
賃貸家賃～現代賃	借賃家賃 現代賃
入さき（引らくらいめそうか）	人
庭の状態	悪1-2-3-4-5良
大学からの距離	
バス停の有無	
周辺の雑居費	
感想	

調査シート

ウスにプランを変更し、プロジェクトを進めていった。

まず、大学近辺の空き家に対して実際に足を運び、調査を行った。調査には、調査項目を設定し、それぞれの調査対象をデータ化し、比較検討を重ねながら、対象物件を選定していった。

その結果、シェアハウスとして大学生が住みやすいよう大学近くで、住宅街のため地域交流を図りやすいと思われる空き家を数件選定した。

空き家の選定後は、空き家の持ち主の方と連絡をとりながら、内覧会を行い、それぞれの空き家の状況を確認しながら、実際に改修する空き家を一軒に絞った。

対象物件が決定した後は、空き家の測量調査を行い、敷地や、内部を図面化した。

図面化したのち、模型を製作し、空き家の改修案を1/30スケールで検討した。



改修案模型



制作風景



対象物件模型

改修案は、

- ・学生の住むシェアハウス
- ・工学部の学生が近くに住むことから「ものづくり」をテーマに、学生と地域住民が創作活動を通じて、交流を図る

という2つのテーマで、空き家を地域交流施設にリノベーションする。

※本プロジェクトは、現在進行中で、現在はリノベーションに関する諸条件を整理しながら実施への準備を着々と進めている。ただ、現在計画中、進行中のプロジェクトであるため、公開できない内容があるため、諸要素をぼかして記載しているため、ご了承ください。

# あみゆめカフェ

## ～知って、好きになって、発信する 未来に繋げるカフェづくり～

課外活動

地域交流

代表者：農学部資源生物科学科 3年 中原 沙彩  
農学部生物生産科学科 3年 鈴木 美果

### 連携先

DogCafe Ami

森藤あかね（農学部資源生物科学科 2年）  
矢島 優仁（農学部資源生物科学科 2年）

### 顧問教員

福与 徳文（農学部・教授）

### プロジェクトの概要

#### ●活動背景

茨城大学農学部キャンパスは阿見町にある。のどかで地域の人も暖かく、住んでいてとてもよい町だと感じる。しかし、水戸キャンパスで学ぶ茨城大学生（農学部以外の学生）の間では、阿見町の認知度は低い。さらに、地域の方からも農学部についてよく知らないという声を聞くことから、農学部と阿見町の町民との交流も未だ薄いのではないかと考える。

茨城大学では、地域について考える講義「茨城学」が開講されている。この講義からも影響を受けた。自分たちから積極的に町について知り、行動を起こすことで阿見町をもっと好きになり、活性化できないかと考えた。昨年度から活動を開始し、今年度は新たなメンバーも加わった。

#### ●活動目的

「阿見町を知って、好きになって、発信する」をコンセプトとし、阿見町についての情報交換を活性化させる。さらに、阿見町の農家さんとの繋がりも作り、阿見町の農産物を使った料理を提供することで阿見町の農産物や農家をより多くの人に知ってもらい、親しんでもらう。これらを踏まえたイベントを開催することで、茨城大学と阿見町の方々との交流の場を作る。

### 参加者

阿蘇 日和（農学部資源生物科学科 3年）  
小貫えみり（農学部地域環境科学科 3年）  
加来 萌菜（農学部資源生物科学科 3年）  
河添 京（農学部資源生物科学科 3年）  
黒坂 愛美（農学部資源生物科学科 3年）  
鈴木 美果（農学部生物生産科学科 3年）  
高木明香莉（農学部資源生物科学科 3年）  
田口真秀子（農学部資源生物科学科 3年）  
武井あゆ菜（農学部資源生物科学科 3年）  
中原 沙彩（農学部資源生物科学科 3年）  
滑川 晶子（農学部資源生物科学科 3年）  
細川 寛（農学部資源生物科学科 3年）  
前田 衣美（農学部資源生物科学科 3年）  
丸田 敬子（農学部資源生物科学科 3年）  
山田 尚主（農学部資源生物科学科 3年）  
石橋由以子（農学部資源生物科学科 2年）  
稲森 笙（農学部生物生産科学科 2年）  
加藤 由芽（農学部資源生物科学科 2年）  
菊池 真緒（農学部資源生物科学科 2年）  
君和田 勁（農学部生物生産科学科 2年）  
熊倉 琴音（農学部地域環境科学科 2年）  
酒井 円香（農学部資源生物科学科 2年）  
白井 るみ（農学部生物生産科学科 2年）  
田村嘉奈子（農学部地域環境科学科 2年）

## プロジェクトの成果報告

今年度は、マルシェの開催、学祭への出店、阿見町の情報収集という、大きく3つの活動を行った。

### あみゆめマルシェ開催

#### 概要

日時：7月1日（土）、2日（日）

場所：DogCafe Ami

阿見町総合運動公園そばにある、DogCafe Amiと協同でイベントを主催した。マルシェとはフランス語で「市場」の意味である。以下の3点を目的として、阿見町でマルシェを開催することとなった。

- ・学生と地域の方が交流するきっかけを作ること
- ・生産者の負担なく農産物や加工品を販売する場を提供すること
- ・多くの出店者とお客様が一堂に会する機会とし、阿見を盛り上げること

共催として出店の依頼・会場設営・広報活動なども行った。結果として35団体以上に出品していただき、従来のイベントより規模が大きくなった。その出店者の内訳は、阿見町の農家や茨城大学農学部その他サークル、雑貨や軽食などの移動販売であった。さらに、ミニドックランを設けることで動物愛護団体の活動の場も作ることができた。

我々もあみゆめカフェとして出店し、メロンムース約40個、ニョッキ約50食、おやき約70食を販売した。

マルシェに訪れた、阿見町内または町外からのお客様に、阿見町の魅力に気づいてもらうことで地域の活性化を目指した。



あみゆめマルシェ当日の様子

#### メニュー

- \*阿見グリーンメロンのムース
- \*じゃがいもニョッキ
- \*かぼちゃおやき

メロンのムースは当初ヨーグルトムースにする予定であったが、メロンの酵素の特性上ヨーグルトでは固まらなかったため、メロンムースに変更し、上に丸くくりぬいたメロンを乗せた。結果として阿見グリーンメロンならではの爽やかな味わいが増し、良いものとなった。ニョッキは加熱が均一でないと食感が変わってしまうなどの点が難しかった。しかしソースを普通のトマトソースからトマトクリームソースに変更したことで、ニョッキ特有の食感によく合った品にできた。おやきは当初考えていた複数種類の具の中からかぼちゃのペーストを選び、生地の高さと、かぼちゃ本来の甘さを残すことにこだわった。

マルシェ本番の調理については、キッチンカーをお借りして、前日に仕込み、当日の朝に調理を行い、出来上がり次第会場に運搬した。しかし、製造量に対して調理場に十分な広さがなく、当日調理担当の負担が重くなってしまった。事前の調理場についての情報の把握と、本番調理を想定した試作が不十分であったことが反省点である。





マルシェで提供した3点のメニュー

## 広報

広報活動は以下を中心に行った。

- ・ Twitter、FacebookなどのSNSの利用
- ・ チラシの配布と阿見中学校への掲載  
各イベントにお客様に来ていただいたことで、阿見の情報とあみゆめの活動についてSNSを中心に発信できたと実感した。  
しかしチラシの作成・掲載の連絡等が遅れ、昨年と比べて掲載箇所が少なくなってしまったことが反省点である。



あみゆめマルシェのチラシ

## お客様からの感想

屋外での開催であり、用意したアンケートに思うように答えていただけなかった。しかし、メニューについて以下のようにお声掛け頂いた。

- 「メロンの甘みがほどよく、食べやすい一品」
- 「ニョッキはオリジナルのクリームソースがよく合っている」
- 「焼きたてのおやきが自然の甘さでおいしい」

## 出店した農学部のサークルからの言葉

以下のコメントを頂いた。  
「鍬耕祭以外での活動はあまりなかったので、新たな活動の場を与えていただいたことに感謝している。阿見町の素晴らしさを再認識することもでき、有意義であった。」



農家による阿見町でとれた野菜や加工品の販売

## 鍬耕祭での販売

### 概要

10月28日(土)、29日(日)

阿見キャンパスの学園祭に出店した。学生や地域の人に活動を知ってもらうことを目的とした。地域の食材を知り、加工し、発信することができた。また、用意した約200個のマフィンが完売した。

### メニュー

- \* さつまいもマフィン
- \* バターナッツかぼちゃマフィン

マフィンにかぼちゃとさつまを練り込む方法を検討し、ペーストを生地に混ぜ込む+角切りを上に乗せるという案で試作が進行した。さつまいもについては概ね考えていた通りに作ることができ、しっかりとさつまいもを感じられるマフィンの上に、黒ゴマをのせてアクセントとした。バターナッツかぼちゃは非常に水分が多く、さつまいもと同じように作っても生地が緩すぎてしまった為、試作を繰り返しかぼちゃの水分を絞る量や薄力粉の量を調整した。その結果、マフィンとプリンの中間のような食感となり、味の良さも相まって実際に買ってくださった方々から好評であった。



食べ歩きができるよう包装も工夫したマフィン



鋤耕祭で使用したロゴ

## 次回カフェへ向けたアンケートの実施

阿見町で採れた野菜を加工するにあたり、メニューにも町の方々の意見を取り入れたいと考え、アンケートを実施した。シールを貼るだけの簡単な形式にすることで多くの方の意見を集めることができた。



メニューに関するアンケート

## あみゆめだよりの作成

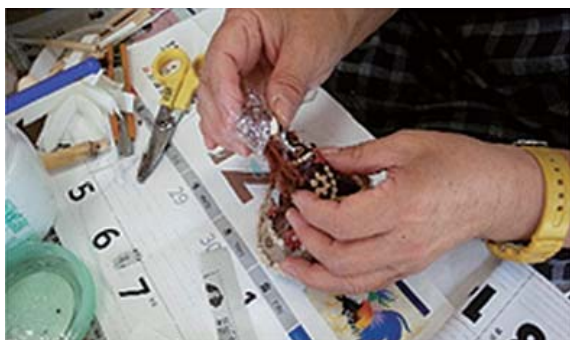
### 概要

コンセプトを元にした「阿見のことを知って発信する」という活動の一環で、阿見町郷土虹の会の方々に取材をさせていただいた。阿見の工芸品である草人形を作成している団体だ。

阿見町の農産物だけでなく、伝統・歴史・産業などに触れ、阿見町の魅力を発見、共有することを目的とした。取材では、実際に製作されている場所にお邪魔して、作業風景を見学し、草人形に関するお話を聞くことができた。得られた情報は、簡単にまとめてあみゆめのホームページに掲載するという形で発信している。今回の取材を第一弾として、次年度以降も取材を重ね、将来的には阿見町の魅力をまとめた広報誌を製作することを考えている。



草人形



草人形の制作風景



あみゆめだより～草人形編～

「あみさんぽマップ」の作成

概要

あみゆめでは、地元の農産品を用いたメニューを考え、提供する活動を行っている。しかし、実際に阿見町で飲食業・食品製造業を営まれているお店はその活動において

ロフェッショナルである。そのようなお店を取材させていただくことで自分たちの活動の指針とすること、更にはその内容を発信することで地域に根付いたお店の素晴らしさを伝えたいという思いから、「あみさんぽマップ」の製作を行った。

取材するエリアを定めた上で、その地域にあるお店をリストアップし、電話での取材の交渉、現地での取材を行って、レポートとマップにまとめた。

今回の活動では、4店にご協力いただいて取材を行うことが出来た。しかし阿見町にはまだまだ魅力的なお店が沢山ある。それらのお店の取材についても次年度以降の活動を積み重ねていきたい。



あみさんぽマップ

●反省と今後の展望

今年度は、あみゆめ内部のイベントだけではなく他の団体と連携をすることで、より幅広い層の方々に阿見産の野菜から作った料理を味わってもらい知ってもらうことができたと考えている。

また、茨城大学農学部キャンパス周辺の飲食業・食品製造業などでパンフレットに載っているような内容だけでなく、実際に自分たちで足を運んで取材し、自分たち大学生目線の生の情報を収集し、発信できるように準備

した。

今年度の活動について、1月のカフェイベント開催も計画していたが、メンバー同士の協力体制をうまく構成できず、頓挫してしまった。後学期に入り、中心となるメンバーの学業と活動との両立が厳しくなり、会議の参加率が下がってしまったことが原因として挙げられる。

昨年までは、阿見で野菜を育てている農家に直接連絡を取り、野菜を購入させていただいていた。しかし、今年度は自分たちの活動の趣旨である「加工をすることで付加価値を高め、阿見の野菜の魅力を発信したいという」という部分をうまく伝え共有することが出来ず、一部の農家との連携が滞ってしまった。

今後の展望としては、後輩につないでいくために、団体としての体制について考え直した上で、今後も活動を継続したいと考えている。今年度作成した「あみさんぽマップ」や「あみゆめだより」をSNSやホームページを活用し発信する。また、カフェ活動の場でも展示することでお客様とのコミュニケーションの糸口としたい。



日常の会議風景

# FES (Food Education Supporter)

## ～食育応援隊～

教育・研究

ボランティア

地域交流

代表者：農学部生物生産科学科 3年 小川 真澄

### 連携先

JA茨城かすみ  
青田 洋一様（食育担当）

阿見町教育委員会  
菅谷 道生様（阿見町教育長）

阿見第一小学校  
和田 和彦様

阿見第二小学校  
松本 貴子様

阿見小学校  
篠崎 博明様

本郷小学校  
根本 正様

舟島小学校  
宮本 好弘様

君原小学校  
白戸 文男様

吉原小学校  
池田 直哉様

実穀小学校  
山本 光明様

### 顧問教員

安江 健（農学部・教授）

### 参加者

小川 真澄（農学部生物生産科学科 3年）  
寺本 朱里（農学部生物生産科学科 3年）  
黒澤まりな（農学部資源生物科学科 2年）  
渡邊 明花（農学部資源生物科学科 2年）  
吉田 健人（農学研究科地域環境科学  
専M2）

### プロジェクトの概要

阿見町では、町内8校の小学校に対し、食育事業が行われている。茨大農学部生もサークル活動を通じ、2014年度まで支援していた。しかし、そのサークルの撤退により、食育事業の縮小を余儀なくされてしまった。そのため、2014年度に設立された本サークルが食育活動を支援するようになった。本プロジェクトでは、阿見町の食育事業に参画し、小学校の総合的な学習の時間等の栽培活動を支援するとともに、食育推進に貢献する。プロジェクトの目標は3つあり、1つは阿見町の食育に参画し、小学生に食や農業に関心をもってもらうことである。

2つめは、町内8小学校で行われている食育事業を支援し、さらに充実した食育活動が行えるようにサポート、役割分担することである。3つめは食育通信を毎月発行し、食育授業を一時的な体験活動で終わらせず、継続的に興味を持ってもらえるような情報発信を

することである。本プロジェクトの最終的な目標は、小学生に学校での食育授業や我々が発行する食育通信を通じ、普段口にする給食などの食べ物に興味・関心を持ってもらう事である。そして、ゆくゆくは、小学生を中心として阿見町全体に食育の環が形成されることにある。阿見町を全国でも有数の食育が盛んな町にしたいと考えている。



トウモロコシの収穫（阿見小）

活動日程は基本的に小学校の予定に合わせるため、当日授業が入っていないメンバーが小学校に行き活動することになる。なお学校とメンバーの予定はJA茨城かすみの方々が取り仕切ってくれている。年間目標は年度終わりのミーティングで個々に反省点や、その改善点などを話し合い、そのうえで次年度の活動目標を立てている。また、週間のミーティングをすることで、食育通信の内容の向上などを図ったり、改善点を挙げて次回の活動に生かしたりしている。連携先の小学校とは年度の始まりに、JA茨城かすみの方々と交えた会議を行い、1年を通じた食育活動の概要を話し合っている。連携先の小学校での活動の際は、毎回、各先生方に挨拶をし、メンバーの顔や食育活動していることを覚えてもらうように努めている。

## プロジェクトの成果報告

阿見町の食育に参画し、小学生に食や農業に関心をもってもらうことができた。また、食育通信を毎月発行し、食育授業を一時的な体験活動で終わらせず、継続的に興味を持ってもらえるような情報発信をすることもできた。小学校の総合的学習の時間でJAの方が行う授業に学生が参加し、学生の視点から「食」に関心を持ってもらうような授業を行った。食育に関する企画しているサークルは他にもあるが、それは自由参加のものであり、学校外のもので行われている事が多く、食育に関心の強い児童や家庭でなければ参加しないと考えられる。しかし、小学校の授業時間内の食育授業は、児童全員が参加するため、あまり関心のない子供たちにも興味をもってもらうきっかけ作りができたと考えられる。さらに、食育通信の発行を行ったことで、その効果を家庭にまで波及でき、家族ぐるみで「食」への関心がわき、学校での食育に関する話題提供にもなった。食育通信は、阿見町の特産品であるヤーコンについてのメイン記事と、月々の旬の食材などに関する記事についてまとめており、児童だけではなく大人が見ることもできる内容にしている。今後の食育通信は、毎月同じ構成の記事にせず、柔軟な思考でわかりやすく作成したい。



9月の食育通信のようす

他には、農協・教育委員会・茨大生で行われている食育事業に、農家の方々など様々な立場の人々に関わっていただけるような取組を主体的・側面的に支援したいと考えている。来年度も力を入れたいのはサークルの人材確保である。現在のメンバー数では、食育通信作成時にフットワークが軽いといった面がある一方、一人ひとりの負担は大きくなってしまふ。そのためにも来年度からは、SNSなどを通じて、サークルの活動内容を学外にも積極的にアピールしていきたい。また、今年度の活動は、学校でメンバーが授業を行うなど自発的に活動することもあったが、基本的にはJA茨城かすみの方々からの指示を受けてから行動する形が多かったので、「食」に関心を持ってもらうために、こういう活動をしたらどうかといった自分たちの意見も積極的に話していきたいと感じた。



ヤーコンに関する授業の様子

# のらボーイ&のらガール ～食農教育プロジェクト～

教育・研究

課外活動

ボランティア

地域交流

代表者：農学部生物生産科学科 3年 寺尾 正樹

## 連携先

のらっくす農園、ひさまつ農園、アサザ基金、グランドワーク笠間、そば打ち同好会、牛久うれしく放送局、いばらき子ども大学、阿見町男女共同参画センター

## 顧問教員

小松崎 将一（農学部・教授）

## 参加者

寺尾 正樹（農学部生物生産科学科 3年）  
田辺 修都（農学部生物生産科学科 3年）  
高間 梨央（農学部生物生産科学科 3年）  
青木 梨乃（農学部生物生産科学科 3年）  
松山 直樹（農学部生物生産科学科 3年）  
増澤 龍一（農学部生物生産科学科 3年）  
山田 尚主（農学部資源生物科学科 3年）  
菅野 可菜（農学部資源生物科学科 3年）  
松岡 拓志（農学部地域環境科学科 3年）  
佐藤 充（農学部地域環境科学科 3年）  
佐々木亮輔（農学部生物生産科学科 4年）  
國分 拓也（農学部生物生産科学科 4年）  
小林 希美（農学部生物生産科学科 4年）  
鎌塚 倫成（農学部生物生産科学科 4年）  
押田 朋起（農学部資源生物科学科 4年）  
武波 洋志（農学部資源生物科学科 4年）  
小野 涉（農学部資源生物科学科 4年）  
飯村 拓也（農学部資源生物科学科 4年）  
木村 茉由（農学部地域環境科学科 4年）  
五十嵐瑞稀（農学部地域環境科学科 4年）  
渡邊亜由子（農学部地域環境科学科 4年）

小林 佳奈（農学部地域環境科学科 4年）  
久保田智大（農学部地域環境科学科 4年）  
向井 龍太（農学部地域環境科学科 4年）

## プロジェクトの概要

現在、農業に関わる人たちの数は減少しており、食や農業に関する知識、関心の低下が危ぶまれています。それは国内トップクラスの農業産地である茨城県でも例外ではなく、耕作放棄地の面積は年々増加しています。私たちは国内第2位の農業県である茨城県で農業との関わりが薄い方たちに学生という立場から食や農業について正しく知ってもらいと共に、地域をより活発に盛り上げることを目的としています。

主な活動としては耕作放棄地の開拓、開拓した土地を利用した耕作・食農教育イベントの企画・運営、農業・農村を応援する大学生サークルネットワークへの参加、NPO法人グランドワーク笠間さんとの協同活動、牛久沼周辺の耕作放棄地の開拓、学園祭への出店、ラジオの収録などがあります。

活動日は基本毎週土曜日で、このほかに農作業の関係や食農教育イベントの開催、外部連携との活動のために、不定期に活動が追加されます。

## プロジェクトの成果報告

・耕作放棄地の開拓、耕作、イベントの企画  
現在、私たちはのらっくす農園・ひさまつ農園の2つの圃場を管理しており、それらは



耕作放棄地であった。今年は先代の学生が開拓した面積を2倍近く拡大することができた。今年度は両圃場で土壌検査を行い、農場主にアドバイスを頂きつつ、しっかりとした施肥管理のもと作物の栽培を行った。

今年度は昨年度の夏野菜とそば、サツマイモに加え、ジャガイモ、カボチャ、玉ねぎ、チューリップ、大根、葉物野菜など様々な野菜類の栽培を無農薬で挑戦しました。そのほとんどが成功しましたが、カボチャや大根は大きさが今一つといった具合で、来年の課題になりました。

また、私たちはのらっくす農園を利用して小学生とその保護者を対象に食農教育活動を行いました。昨年度は阿見町周辺の小学生を招待していましたが、今年度はつくば市や牛久市の小学生への招待を行い、範囲の拡大につながった。夏には蕎麦の種まきと夏野菜カレー作りイベントを行った。昨年作成したピザ釜のレンガを利用し、カレーとご飯を炊いた。参加者にはそばの種まきをしてもらったのちに、夏野菜の収穫と調理を体験していただいた。秋にはそばの収穫と脱穀を体験していただきました。脱穀や選別には現在使用されているような機械ではなく手動の道具を使用していただきました。また、私たちが栽培したサツマイモを配らせていただきました。そして、この秋のイベントでは参加者の数がこれまでのイベントの中で最大となりました。冬には、そば打ちの体験をしていただきました。参加者が多く2日に分けて開催しました。これは蕎麦打ち同好会の方や阿見町男女共同参画センターの方の協力で開催することができました。

また、夏、秋、冬のすべてのイベントにおいて子供たちとのレクリエーションと作物や農業に関する授業を行いました。



蕎麦打ちイベントでの集合写真

#### ・イベント後の参加者アンケートに基づいた成果

農業を参加者に体験していただくことで農業に対する3Kの固定観念を捨てていただくことができました。また、女学生が農業をしていることで、農業をする女性のイメージアップにつながりました。

耕作放棄地の多い茨城県で農地を有効に活用できました。

本格的な食農教育により、児童やその保護者が「食」や「農」に対する正しい知識、理解を得ることができ、農業における担い手不足や「食」の分野における食生活の乱れなどの課題に良い影響を与られました。

茨城県常陸太田市特産の常陸秋そばの知名度を上げることができました。

茨城県が北海道に次ぐ第2位の農業県であることを知っていただくことができました。保護者の方から子どもが集中して話を聞いていて驚いたと伺い、このイベントが参加した児童にとって教育の場になったという自覚と誇りを持つことができた。

#### ・農業・農村を応援する大学生サークルネットワークへの参加

全国の大学の農業サークル17団体が参加しているネットワークで年に数回、各県で交流会を兼ねた農作業を行っています。夏に世

界農業遺産である金沢の千枚田で稲刈りを、冬に沖縄県にあるサトウキビ畑でサトウキビ狩りなどを行いました。このように県内にはない伝統的な農業に触れることに加えて、志を同じくした全国の様々な仲間たちとの情報交換により、互いの長所を取り入れながら、今後の活動への士気を上げることにもつながりました。

・NPO法人グラウンドワーク笠間さんとの協同活動

笠間のまちおこしを目的としたグラウンドワーク笠間さんの活動にご一緒させていただき活動しています。農業の6次産業化のための研究、作物育成、町のお祭りのお手伝いなどをおこないました。

・牛久沼周辺の耕作放棄地の開拓

千葉大学の援農お宝発掘隊さんと協働しているプロジェクトで、昨年度からスタートしました。昨年度に続き今年度も牛久の耕作放棄地を水田に戻し、実際に稲を育てることに成功しました。開拓した水田は付近の小中学生が利用したり、アサザ基金が開くイベントに使用されたりすることとなりました。そのイベントのお手伝いとして参加することができました。

・鍬耕祭、茨苑祭への出店

阿見地区で開催された鍬耕祭では圃場で育てたサツマイモをサツマイモ汁として販売しました。台風の中での開催となりましたが無事完売することができました。水戸地区で開催された茨苑祭では来場者へのアンケート活動を行うことでその年の食農教育への関心やどのようなニーズがあるかを調査しました。

そのアンケートの結果の一部をここに掲載します。また、棒グラフの縦軸は人数です。

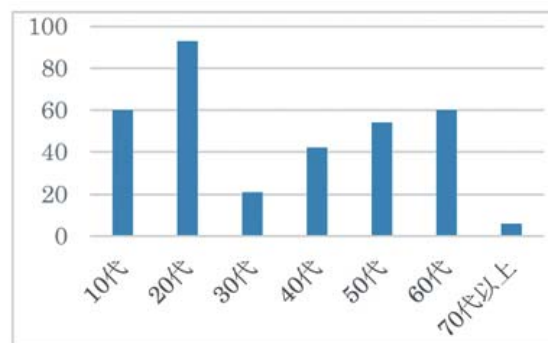


図1 年齢別

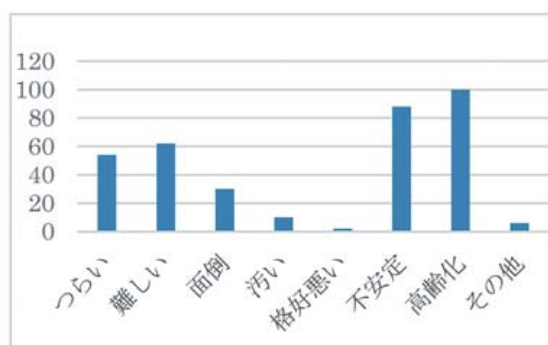


図2 農業に対するマイナスイメージ

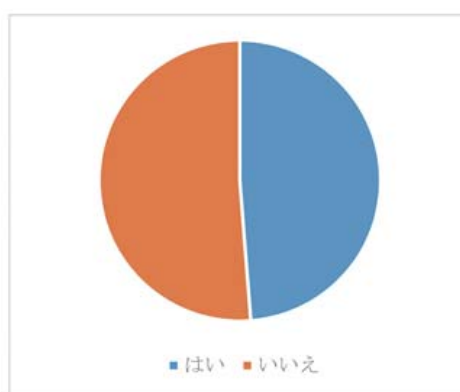


図3 茨城県が農業産出額第2位だと知っていたか。

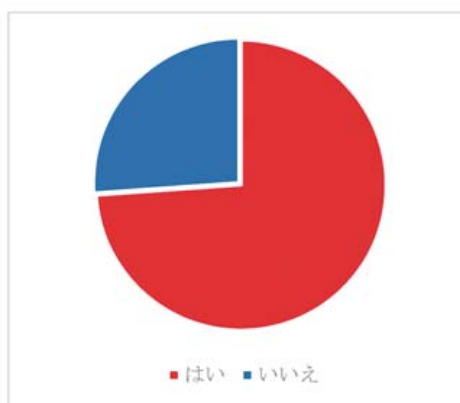


図4 食農教育イベントに参加したいか。

今年度は約300名の方がアンケートに協力してくださいました。図2の農業に対するマイナスイメージや図3にあるような茨城県が農業産出額2位であることの認知度の低さを私たちの開催するイベントにおいて改善して行きたいと考えております。

・今後の課題と展望

今年度は昨年度の課題となっていた規模の限界を少しではあるが超えることができた。だが、参加人数が増えることによって私たちの力不足が明らかになりました。そのため、来年度は学内外のイベントにスタッフや参加者として参加し、私たちがスキルアップすることを課題にしたいと考えております。

# SENBA Project

教育・研究

課外活動

地域交流

代表者：理工学研究科 2年 渡辺 康太

## 連携先

茨城大学 児童文化研究会  
黄門ローイングクラブ  
茨城大学ボート部

## 顧問教員

西野由希子（人文社会科学部・教授）

## 参加者

渡辺 康太（理工学研究科知能システム工学  
専攻 1年）  
長永 勇太（人文学部社会科学科 3年）  
佐藤 麻美（教育学部 養護教諭養成課程  
3年）

## プロジェクトの概要

茨城大学の学生で作られたSENBA Projectを中心に千波湖を利用したボート教室を開く。

遊びを通して協力して目標達成（船を漕ぐこと）することを学んでもらう。

また、スポーツイベントなどの体を動かした体験により、千波湖が地域の子供達にとって親しみ深いものとなり、地域の誇りとして再認識してもらおう。

期間：8月18～20

時間：10時～16時

場所：千波湖

## プロジェクトの成果報告

### ■結果

1日目

8月18日（金）

参加人数：40人

地域の学童が参加してくれた（15名程度）

当日千波公園に遊びに来ていた小学生が参加  
新聞社から取材を受ける



<https://mainichi.jp/articles/20170820/ddl/k08/040/048000c>

図1：千波湖ボート教室取材記事

2日目

8月18日（土）

参加人数：10人

お昼の時間帯から天候が荒れたため2時間程度で中止

3日目  
8月18日（日）  
参加人数80人

この日は天気も良く公園には多くの人遊びにいており、当日参加者がとても多かった。

同じウッドデッキエリア内で別の団体が学生向けイベントを実施しておりそちらの参加者がイベント終了時に参加してくれた。

初日の取材記事を読んで、参加するために来てくれた参加者がいた

後日水戸市環境課から連絡があり来年の千波湖ボート教室開催を共同で実施するお話をいただいた。

#### イベントの流れ



図 2、3 千波湖ボート教室本部

ボート教室はまず千波湖のウッドデッキにある本部で受け付けをして、ボートの漕ぎ方、安全面への注意喚起を行う。



図 4、5 マシンエルゴメータを漕ぐ参加者

参加者は本部においてあるマシンエルゴメータという陸上でボートの動きができるエクササイズマシンを実施することでボートの動きを理解して貰う。





図6, 7 発着場所から出発

一通りの説明と練習をしたのち発着地点より乗ってもらいざ出発。誘導やアナウンス等のサポートは主に児童文化研究会の方々に手伝ってもらった。



図7, 8, 9 ボートを漕ぐ参加者

今回のイベントのコースでは、千波湖の中央にある大噴水の周りを一周する。

また途中で黄門ローイングクラブの方が直接漕ぎ方を指導したりした。

100人以上の参加者がいたが怪我、事故は一切なかった。



図10 ウッドデッキからイベントを見る参加者



このイベントでは3日間で小学生をメインとして約130人が参加してくれた。

最終日は80人の参加者に満足度調査をし、イベントに対する満足度は5段階で4以上が100%。

またアンケートを取った全員が次回開始を希望した。

よって千波湖を利用した体験型イベントには一定の需要があることが分かった。

今後継続的に千波湖でボート教室を開くことは千波湖の活性化につながるといえる。

# 廃校那珂湊二高を活用した多世代交流プロジェクト —話題のグランピングに学生が挑戦—

課外活動

地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 阪本 咲

## 連携先

ひたちなか市役所

## 顧問教員

伊藤 哲司（人文社会科学部・教授）

## 参加者

阪本 咲（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

川田 綾香（人文学部人文社会科学部 2年）

川崎 結衣（人文学部人文社会科学部 2年）

植松 祐二（人文学部人文社会科学部 2年）

千葉 綾馬（人文学部人文社会科学部 2年）

鹿野はるか（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）

埜 理（人文社会科学部人間文化学科 1年）

若菜 美里（人文社会科学部人間文化学科 1年）

菅原 慎人（工学部機械工学科 1年）

小林 大樹（工学部機械工学科 1年）

角 俊輔（工学部機械工学科 1年）

渡邊 永（工学部マテリアル工学科 1年）

## プロジェクトの概要

### ●プロジェクトの背景と目的

平成30年4月から完全な空き施設となる旧県立那珂湊第二高等学校跡地（以降、湊二高跡地）では、地域の人々が気軽に集まれるようなカフェの運営やイベントの開催といった様々な利活用案が地域住民から寄せられている。学生は、2017年9月に地域住民による湊二高利活用検討会議（フューチャーズミーティング）に初めて参加し、利活用案のひとつとして、地域の外の若者にも湊二高跡地を利用してもらい地域の活性化につなげようと「グランピング」案を提案した。しかし、こういった立案が盛んに行われる一方で、利活用案実施に関して、その担い手がまだまだ不足しているという現状がある。そこで、学生が考案した「グランピング企画」と「地域の人々が気軽に集まれるような共同プロジェクト」を同日に行うことで、利活用担い手不足の課題を解決する一助となるのではないかと考えた。本プロジェクトは、ひたちなか市役所とも連携しながら、学生が利活用案の実施主体となること、そして「地域の人々が気軽に集まれるような共同のプロジェクト」を実施することにより地域住民との多世代での交流を深めることを目的とする。

### ●活動内容

来年度からの湊二高跡地利活用実施の実現に向け、今年度は前段階として①湊二高跡地の視察と②地域住民との交流イベントの開催

を行った。

この湊二高跡地利活用には、これまで地域の住民が主体となって動いてきていた。学生は今年度から携わることになったため、湊二高はもちろん那珂湊地域にも馴染みのないメンバーが多かった。そこでまず、湊二高跡地へ実際に赴き、そこがどういったところなのか知る必要があると思った。そして、那珂湊地域に暮らし、利活用を実現させようと動く地域住民を知ることこそ湊二高跡地利活用の実施には不可欠なのではないかと考え、イベントを通して交流し仲を深めることを目指した。

#### ① 湊二高跡地の視察

湊二高跡地を利活用するにあたり、そこが実際にはどういった場所であり、どのように利用していいのかを考えるため、ひたちなか市役所の方に協力していただき、視察を行った。視察は二度行い、現在ある建物のうち、使用可能な4つとグラウンド、駐車場を見て回った。

#### ② 地域住民との交流イベントの開催

グランピング同日に開催予定の共同プロジェクト「珈琲を知ろう」に関連させて、このイベントを「おいもカフェ」と称し、実施した。このイベントの目的は、コーヒーと焼き芋を楽しみながら地域住民と学生との仲を深めることにある。焼き芋は、地域住民の中にいらっしゃったさつまいも農家の方に提供していただいた。また、コーヒーは、ひたちなか市に本社を置くサザコーヒーの豆を3種類用意し、さらに3種類の淹れ方で提供した。ほかにも、大人も子供も楽しめるグループ対抗のゲーム大会を行ったり、歌手活動も行っている地域住民の方に楽曲を披露していただいたりした。参加者は、本プロジェクトのメンバーと、連携先のひたちなか市役所の職員、

「珈琲を知ろう」の考案者を含むフューチャーズミーティングに参加する地域住民と高校生、小学生の約60名である。

### プロジェクトの成果報告

#### ●成果

活動を通して得られた以下の四点を本プロジェクトの成果とする。

〈湊二高跡地の視察〉

#### (1) 湊二高跡地について知る

来年度から実際に使用できる教室やスペースの広さ、器具や水道・電気等のライフラインの状態などを確認することができた。特に学生の企画するグランピングは参加者の宿泊を伴うため、それに適した環境づくりをしたり外部施設と連携したりする必要があることが分かった。二度の視察を通して、実施に向けて今後企画の具体的なことを決定する際に不可欠な情報を得ることができた。

〈地域住民との交流イベントの開催〉

#### (2) 地域住民との多世代交流

「おいもカフェ」には小学生からご年配者まで幅広い年代の地域住民に参加していただくことができた。本プロジェクトのメンバーも企画・運営するだけでなく、活動に参加した。参加者をいくつかの小さなグループに分けたことで、これまで話す機会の無かった人とも世代を超えて密な会話を楽しむことが出来た。さらにグループ単位で様々なゲームに挑戦してもらったことで、連帯感が生まれ、より密接な信頼関係を築くことができた。イベント後に参加者に実施したアンケートでも「年齢を超えて大人も学生も楽しく交流できた」「いろいろな人と話せてよかった」「班ごとのクイズやじゃんけんが夢中になれて楽しかった」などの声をいただいた。



### (3) 地域への愛着

名産のさつまいもやサザコーヒーのコーヒー豆を使用したり、クイズの問題に市に関するものを盛り込んだりして、さまざまな点でひたちなか市にこだわったことで、参加者全員が地域に触れる良い機会になった。前述の通り、本プロジェクトのメンバーはひたちなか市や那珂湊地域にほとんど馴染みがなかったが、地域とそこに暮らす人々に接し、活動拠点である那珂湊地域を身近に感じることができるようになった。そしてそれだけでなく、地域住民同士のつながりを強め、地域への愛着をより深めることができた。

### (4) 「珈琲を知ろう」の実現への貢献

コーヒー豆の種類や淹れ方にこだわって提供し、実際にその場で反応を見ることができたため、受けの良いコーヒー豆の種類や飲み方の傾向、また、コーヒーをより楽しんでもらうための方策など、「珈琲を知ろう」を実施する際に役立てられるような情報を得ることが出来た。



「おいもカフェ」集合写真



ゲーム企画に挑戦する様子



地域住民による楽曲披露の様子

### ●メディア

- ・「市報ひたちなか～まちの話題」への掲載
- ・茨城新聞への掲載



茨城新聞 2017年12月27日(水) 付  
14面「住民と交流、活用探る」

## ●今後の展望

今年度は活動拠点である湊二高跡地を知ること、そして地域住民と深いつながりを持つことを目的として活動してきた。そのため、実際には、「湊二高跡地利活用の担い手として利活用案を実施する」という本プロジェクトの最終的な目的を達成するための前段階としての活動にとどまった。この最終目的の達成のために、今後は、現在多くの点で未着手となっている利活用案を実現に向けて進めていきたい。ただし、地域住民との交流は継続して行っていく。

現在フューチャーズミーティングに参加しているのは、学生よりも10歳～20歳、またはそれ以上歳の離れた大人たちである。そのため、若い世代からの視点や学生ならではの発想をフューチャーズミーティングへどんどん発信することを求められている。来年度も本プロジェクトを継続し、アンケートで「地域のために学生が一生懸命頑張ってくれたことに感動した」「今後も頑張って地域を盛り上げてほしい」と言ってくださった地域の方々と、同じ目標を持つ仲間として協力しながら、湊二高跡地の利活用実現、そして成功に向けて尽力していきたい。

# ひたちなか表町商店街活性化プロジェクト

## 地域交流

代表者：人文社会科学部現代社会学科 1年 越中 未穂

### 連携先

合同会社 オモチャファクトリー

### 参加者

鈴木 楓子（人文社会科学部現代社会学科  
1年）

佐藤ちひろ（人文社会科学部現代社会学科  
1年）

堀江 巧実（工学部都市システム工学科  
1年）

三浦 七海（工学部都市システム工学科  
1年）

千田 七海（工学部都市システム工学科  
1年）

### プロジェクトの概要

当プロジェクトは、今年度夏に集中講義として開かれた地域活動の授業であるPBL授業を受講し、地域活動に興味を持った、あるいはもともと地域活動に興味を持った人で集まり、プロジェクトを立ち上げた。

当プロジェクトは、PBL授業で取り扱った、ひたちなか市勝田駅周辺の表町商店街を活性化させるべく発足したものである。この表町商店街とは、居酒屋が多く、夜の賑わいが多いが、一方で子育てをするための施設や家族向けマンションの立地が多く、昼間は本来子育てをする母親同士が歩いているはずが、昼間でも閑散としている。また、これから家族向けの施設がより増えていく方針があるのにも関わらず、そこに住む地元住民が住みやす

い街等誇りに思っている部分はまだまだ少ない。そこで、私たち大学生が地域活動として活性化の一部に参加することで注目を浴び、さらには自分の住む町はこんなところだったのか、と地元の人々に思ってもらえるよう、地域から発信するという面も持っている。また、地域活性化にともない、PBLの授業でお世話なった方々と相談をしながら活性化について考えていく方針である。

### プロジェクトの成果報告

当プロジェクトは、スタートアッププロジェクトのため、主な活動は勝田駅周辺にある地域交流館にて会議のみ行った。地域交流館での会議では、ワークショップを行い、勝田駅周辺の歴史などを学びつつ、それを活かしながらどのように発展していけばいいか討論を行った。そこで出たアイディアはこの先に活かすつもりである。これから、ますます会議を重ね、表町商店街を活性化させるべく地域に対して密着し地域の人に耳を傾け、決してプロジェクトが一人走り、あるいは望まれない活性化をしないよう活動していく方針である。まだまだ確定したものができないが、地域と一緒に、活性化というゴールに向かって連携先の方々とともに走っていく所存である。

## ～ スタートアップ版 ～

# 笠間栗ごはんまいプロジェクト

### 地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 松崎 薫

#### 連携先

NPO法人グラウンドワーク笠間

#### 顧問教員

稲葉 梨恵 (キャリアセンター)

#### 参加者

谷口 智紀 (工学部機械工学科 3年)

野村 明里 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

松崎 薫 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

森 みなみ (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

#### プロジェクトの概要

本プロジェクトは、2017年12月3日に「笠間民芸の里」で開催された、笠間×国際交流×学生がテーマのイベント「マルシェ・ド・カサマロン」において笠間の栗を使用した栗ごはんを提供し、また、イベント運営に関わったプロジェクトである。目的は、笠間の特産品や笠間・日本の魅力を発信し、地域活性化と国際交流を試みることである。

連携先のNPO法人グラウンドワーク笠間は、イベント会場であった「笠間民芸の里」で「グランパとグランマのお店」を運営しており、「マルシェ・ド・カサマロン」を主催した団体である。NPO法人グラウンドワーク笠間の代表である埴茂様と野村が連絡を取り合い、また、メンバーで笠間民芸の里を訪

ねて打ち合わせをすることで連携した。

埴様をはじめとしたNPO法人グラウンドワーク笠間の方々には、栗ごはんの材料を用意していただいたり、作り方を教えていただいたりした。また、栗ごはんの販売場所も提供していただいた。

主な活動は11月16日と12月1日から3日に行った。11月16日は、NPO法人グラウンドワーク笠間と栗ごはん製造の打ち合わせ、会場確認を行った。12月1日は使用する栗の選別や皮むきのための下準備を行い、12月2日には栗の皮むきのほか会場清掃、装飾を行った。国際交流も兼ねたイベントであったので、国旗などを使用し内装を工夫した。12月3日は栗ごはんの製造・販売、レジ、接客手伝い、第二部会場準備、片付け等を行った。

#### プロジェクトの成果報告

私たちは今回、栗ごはんを35パック製造し、販売したがすべて完売することができた。買っていただいた方に笠間の栗をアピールすることができたと考える。また、万国旗やモール、和柄の布などで会場装飾を施し、会場を華やかにすると同時に、イベントの国際交流を視覚的にアピールできたのではないかと考える。

今回は約1ヶ月と準備期間が短く、物品の購入や各機関との情報共有がスムーズにいかなかったことが反省点である。今後は、準備期間を2ヶ月ほど充分にとり、素早くゆとり

をもって物品購入や情報共有を行ってより良い企画やイベントを作りたい。

発表会において、この活動を継続していったらよいと声をかけていただいたことも大きな成果であった。活動を継続することでイベント自体の知名度の上昇、地域への定着など更なる発展が期待できる。

今後の課題としては、「栗は笠間ではなく岩間だ」との意見が多数見られたことから、岩間にも範囲を拡大させたい。また、イベント継続のための後継者を探し、販売価格・分量・保存方法を改善して行きたい。

## 「かすみがうら市子ども未来フェス」サポート活動

ボランティア

地域交流

代表者：人文学部社会科学科 2年 神田 紗帆

### 連携先

松庫義弘（「かすみがうら市子ども未来フェス」実行委員）  
かすみがうら市教育委員会生涯学習課

### 顧問教員

西野由希子（人文社会科学部・教授）

### 参加者

西川 拓真（人文学部社会科学科 3年）

### プロジェクトの概要

●かすみがうら市で2018年3月11日に開催される「かすみがうら市子ども未来フェス」に向けて、実行委員会の方と意見交換等を行い、学生の意見を取り入れていただきながらボランティアという形で当イベントをサポートさせていただく。かすみがうら市では、近隣のつくば市における教育環境の向上を注視しており、それに追随するかたちで当イベントを行うに至った。実行委員のメンバーは退職された市民の方が主であり、子供たちに様々な学習分野に興味をもってもらいたい、将来の夢をより明確に抱いてもらいたい、といった思いで当プロジェクトを運営している。2018年度は4回目の開催であり、これまでも宇宙や化学実験に関する体験型講座などを行っており、子供たちが自ら体験することで学習の幅を広げる重要なツールとなっている。

●本年度の第4回「かすみがうら市子ども未来フェス」においては、学プロ初年度ということもあり、当日スタッフとしてお手伝いさせていただくことがメインの活動となる。今年度は4つの体験型講座が開かれるため、それぞれに当日のみのボランティアを含む学生を配置し、子供たちの意欲的な学習のサポートを行う。その実現のため、当イベントの実行委員による現地ミーティングに参加させていただき、学生もメンバーの一員として当イベントに関わることとなる。かすみがうら市においては、今まで学生と地域の人々の連携活動があまり多くはなかったため、このプロジェクトをきっかけとして、学生の県南地域での活動がより盛んになることが見込まれる。

### プロジェクトの成果報告

●今年度は当サポートプロジェクトの発足年ということもあり、企画段階から学生の意見を取り入れていただくことは難しく、当日のスタッフとしての活動がメインとなった。次年度からは、当イベントに学生の意見を反映し、かすみがうら市の子供たちにより具体的な将来の展望や、未知の分野への興味を抱いてもらおうと考えている。現地ミーティングに関しても、最終段階の打ち合わせからの参加であったため、決定事項の確認や当日使用する設備をまわるといった活動が主であった。次年度には初期段階からの参加を行い、企画段階での提案や、より興味関心を惹きやすいイベント設計などに関われるような活動を

行っていきたい。また、今年度は期間や発足時期の影響などもあり、メンバーの構成や十分なチーム内での連携が行えなかった。連携先の方々と打ち合わせを行った内容の共有が不十分であったなど、協力関係になかったために書類などの不備、行き違いが起きてしまった。そのため、今後はメンバーを増やしつつ、チーム内での役職の確認や役割分担、及び諸連絡のリマインドを積極的に行うことで、当チーム全体として積極的に「かすみがうら市子ども未来フェス」に参加していくような体制をつくっていきたく考えている。

● 「かすみがうら市子ども未来フェス」に学生が携わるのははじめてのことであり、実行委員会の方たちからも対象となる子供たちに近い年齢の学生からより近い立場での提案を受けたい、との意見を度々いただいた。これらを参考に、わたしたち学生が子供の頃に参加したかった体験や、子供たちがさらに広い世界に羽ばたいていく視野を得られるような企画を提案し、実行委員の方々、チームメンバー、顧問の先生、そして参加者の子供たちと一緒に楽しく学べるような場を作りあげていきたい。

3月11日(日) 平成29年度 第10回 Kwcs 千代田公民館・講堂  
午後1時～5時 (12時45分受付開始)  
2018 市内小学生対象・千代田中地区公民館併設  
第4回 かすみがうら市子ども未来フェスティバル  
参加費：1人300円 (幼児 未定)  
小学生は①と②、高学年は③と④ (2つ体験)  
\*おももしろ体験  
①電池を作る②毎日見ている見えない世界  
③電池を作る④みんなが楽しめるゲームを作る⑤  
おももしろ理科先生 飛田 隆久先生 筑波大学生物資源学類 野村 港二先生  
おももしろ理科先生 手島 久先生(講師) ママのプログラミングサロンMomShare(代表) 藤田 知恵美先生  
主催者 青少年育成委員会 かすみがうら市実行委員会 協賛者 かすみがうら市教育委員会  
問合せ かすみがうら市教育委員会 企画学習部 Tel: 029-837-9311 (国語室 雑用)

□男 □女 小学校 年 組 会場への送迎は保護者にてお願いいたします。(本人の送迎はありません)  
参加者氏名(フリガナ) 保護者氏名(同音者):  
参加児童名: 下記のいずれかの方法により、2月8日(土)から 連絡電話:  
①お申し込み ②お申し込みによる 先着順となります (受付時間による 先着順となります) ●参加児童が6名以上等の場合、コピーしてお使い下さい  
③右のQRコードから登録…………… ●参加者 □児童のみ □児童と保護者の付添あり  
④本用紙をファクス Fax: 029-836-2665 ●参加申し込みについて、小まアムデーの有効  
⑤本用紙を あるいは へ直接郵送 小まアムデー □有 □無

当日のポスター

## 平成29年度「学生地域参画プロジェクト」募集要項

### 1. 目的

茨城大学社会連携センターでは、茨城大学の学生が地域社会と連携し、学生らしい斬新で多彩な発想により、地域の抱える課題の解決に向けた取り組みや、地域の活性化に寄与する活動を積極的にすすめられるように「学生地域参画プロジェクト」を設け、これを支援しています。

### 2. 支援対象者

本学の学生とします。

### 3. 連携先

特に定めない。本学の教職員と連携し、学生が主体で行う事業も申請可能とします。

### 4. 募集プロジェクト

#### (1) 対象となるプロジェクトの分野

地域社会と連携した、次の分野のものであることを条件とします。

1. 教育・研究プロジェクト
2. ボランティアプロジェクト
3. 課外活動プロジェクト
4. 地域交流プロジェクト
5. 国際交流プロジェクト

#### (2) 実施期間

原則として単年度での採択となり、継続を希望する企画においても毎年度申請書を提出していただきます。

また、複数年にわたって継続的に活動する希望がある場合には、3年間を目途に計画してください。

#### (3) 支援金額

年間最大30万円を上限とします。(審査により減額して配分する事があります)

### 5. 申請方法

#### (1) 申請資格

本学の学生（大学院生・留学生を含む）であることを条件とします。また、個人、グループを問わず申請が可能です。

ただし、プロジェクトの申請および実施には、アドバイスやサポートを行う顧問教員が必要となります。顧問教員が見つからない場合には社会連携センター事務局までご相談ください。

顧問教員および連携先の担当者と連絡を密にし、企画内容を十分に打ち合わせてください。

プロジェクトに参加する学生は、事業申請までに傷害保険および賠償責任保険に必ず加入してください。未加入者がいることが判明した場合は、採択を取り消す場合があります。

※下記内容での申請および購入等はできません

- ・サークル活動のための物品購入等を目的とした申請
- ・卒業論文、卒業研究、授業、ゼミナール等で取り組む内容での申請
- ・書籍や、税込価格が5万円以上の物品の購入
- ・打ち合わせに伴う飲食物の購入



## (2) 申請方法

所定の「申請書」に記入の上、参加者全員の傷害保険および賠償責任保険に加入していることが分かる書類を添付し、以下の提出期間内に提出してください。

### 【申請書提出期間】

平成29年5月22日(月)～6月2日(金) 9:00～16:00

### 【提出先】

水戸地区：社会連携センター1階地域連携課地域連携係

日立地区：工学部学務第二係

阿見地区：農学部学務係

### 【申請書様式入手先】

<http://www.scc.ibaraki.ac.jp/department/kyousei/students>

なお、申請に関する情報を社会連携センターのホームページ上に掲載しますので、必ずご確認ください。

## 6. 申請プロジェクトの審査方法

### (1) 評価のポイント

審査は4つの観点から行います。

I プロジェクト内容と支援経費の主旨との整合性	II 計画の独創性・魅力
III 計画の実行可能性	IV. 得られる成果・効果等

### (2) 審査の進め方

申請書を審査員が確認し、審査員から質疑があった場合には、申請代表者へメールで照会しますので、回答期限内に質疑について回答してください。

上記回答をいただいてもなお質疑がある場合には、個別にヒアリングを行うことがありますのであらかじめご承知ください。

## 7. 採否の発表等

採否については、平成29年6月下旬頃に申請代表者全員にメールにて通知します。

また、社会連携センターのホームページ、学務部掲示板および各学部掲示板においても発表します。

## 8. 採択後の日程（予定）

プロジェクト実施期間：平成29年7月3日(月)～平成30年1月31日(水)

### (1) プロジェクト実施に関する情報提供・・・平成29年6月下旬（採択通知後）

採択通知後に採択プロジェクトを対象として、プロジェクト実施に関して必要な手続きについての情報提供を行います。

### (2) プロジェクト実施中間報告等・・・平成29年10月中旬～11月上旬

プロジェクトの進捗状況の確認や課題等について話し合う相談会を実施します。

### (3) プロジェクト実施報告会（学生地域活動発表会〈はばたく！茨大生〉）

・・・平成29年12月上旬～中旬頃

プロジェクトの実施内容について、この報告会で発表していただきます。

- (4) プロジェクト実施報告書の提出・・・平成30年2月下旬  
プロジェクトの実施内容をまとめた報告書を提出していただきます。

## 9. その他

- (1) プロジェクトにかかるチラシ、パンフレット、冊子等を作成する際は、「茨城大学社会連携の助成に拠った」旨を明記するとともに、茨城大学ロゴマークと「社会連携センター支援事業」を付記してください。WebやSNSなどで発信する際も同様です。
- (2) 報告書等に添付された事業風景等の写真は、社会連携センターにおいて、ポスター、冊子等に使用する場合がありますので、あらかじめご了承ください。
- (3) 報告書は、茨城大学社会連携センターのホームページ (<http://www.scc.ibaraki.ac.jp/>) および茨城大学図書館ROSEリポジトリいばらき (<http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/>) に掲載する場合がありますので、あらかじめご了承ください。
- (4) 学生地域参画プロジェクトのスタートアップ版として、第2回学生地域参画プロジェクトの募集を9月頃に行いますので、今回の申請には準備が間に合わない場合や、短期間で実施してみたい場合にはご検討ください。

## 10. 注意事項

- (1) 本プロジェクト以外の支援事業へ申請する場合には、本プロジェクトの内容と他事業の内容が重複しないように注意してください。
- (2) デジタルカメラ等については、原則として大学で貸し出しを行いますので、必要とする場合にはあらかじめ社会連携センターまでご連絡ください。
- (3) 購入した物品等はプロジェクト終了後に大学に返還していただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

## 11. 問合せ先

茨城大学社会連携センター

Tel: 029-228-8585

E-mail: [gakupro@ml.ibaraki.ac.jp](mailto:gakupro@ml.ibaraki.ac.jp)

## 平成29年度「学生地域参画プロジェクト(スタートアップ版)」募集要項

### 1. 目的

茨城大学社会連携センターでは、茨城大学の学生が地域社会と連携し、学生らしい斬新で多彩な発想により、地域の抱える課題の解決に向けた取り組みや、地域の活性化に寄与する活動を積極的にすすめられるように「学生地域参画プロジェクト」を設け、これを支援しています。

今回の募集は、学生地域参画プロジェクトのスタートアップ版として実施し、来年度以降も継続できるような新しい取り組みへの支援や、春の募集への申請が間に合わなかった取り組みを支援します。

### 2. 支援対象者

本学の学生とします。

### 3. 連事業への協力者

特に定めません。学外の方や本学の教職員と連携し、学生が主体で行う事業も申請可能とします。

### 4. 募集プロジェクト

#### (1) 対象となるプロジェクトの分野

地域社会と連携した、次の分野のものであることを条件とします。

1. 教育・研究プロジェクト
2. ボランティアプロジェクト
3. 課外活動プロジェクト
4. 地域交流プロジェクト
5. 国際交流プロジェクト

#### (2) 実施期間

平成29年11月上旬～平成30年1月31日（水）

#### (3) 支援金額

年間最大5万円を上限とします。(審査により減額して配分する事があります)

### 5. 申請方法

#### (1) 申請資格

本学の学生（大学院生・留学生を含む）であることを条件とします。また、個人、グループを問わず申請が可能です。

プロジェクトに参加する学生は、事業申請までに傷害保険および賠償責任保険に必ず加入してください。未加入者がいることが判明した場合は、採択を取り消す場合があります。

※下記内容での申請および購入等はできません

- ・サークル活動のための物品購入等を目的とした申請
- ・卒業論文、卒業研究、授業、ゼミナール等で取り組む内容での申請
- ・打ち合わせに伴う飲食物の購入

#### (2) 申請方法

所定の「申請書」に記入の上、参加者全員の傷害保険および賠償責任保険に加入していることが分かる書類を添付し、以下の提出期間内に提出してください。

【申請書提出期間】

平成29年10月11日(水)～10月13日(金) 9:00～16:00

【提出先】

水戸地区：社会連携センター1階地域連携課地域連携係

日立地区：工学部学務第二係

阿見地区：農学部学務係

【申請書様式入手先】

<http://www.scc.ibaraki.ac.jp/department/kyousei/students>

なお、申請に関する情報を社会連携センターのホームページ上に掲載しますので、必ずご確認ください。

## 6. 申請プロジェクトの審査方法

(1) 評価のポイント

審査は4つの観点から行います。

I プロジェクト内容と支援経費の主旨との整合性	II 計画の独創性・魅力
III 計画の実行可能性	IV 得られる成果・効果等

(2) 審査の進め方

申請書を審査員が確認し、審査員から質疑があった場合には、申請代表者へメールで照会しますので、回答期限内に質疑について回答してください。

上記回答をいただいてもなお質疑がある場合には、個別にヒアリングを行うことがありますのであらかじめご承知ください。

## 7. 採否の発表等

採否については、平成29年10月下旬頃に申請代表者全員にメールにて通知します。

また、社会連携センターのホームページ、学務部掲示板および各学部掲示板においても発表します。

## 8. 採択後の日程（予定）

プロジェクト実施期間：平成29年11月1日(水)～平成30年1月31日(水)

(1) プロジェクト実施に関する情報提供・・・平成29年10月下旬（採択通知後）

採択通知後に採択プロジェクトを対象として、プロジェクト実施に関して必要な手続きについての情報提供を行います。

(2) プロジェクト実施報告会（学生地域活動発表会〈はばたく！茨大生〉）

・・・平成29年12月上旬～中旬頃

プロジェクトの実施内容について、この報告会で発表していただきます。

(3) プロジェクト実施報告書の提出・・・平成30年2月下旬

プロジェクトの実施内容をまとめた報告書を提出していただきます。

## 9. その他

(1) プロジェクトにかかるチラシ、パンフレット、冊子等を作成する際は、「茨城大学社会連携

の助成に拠った」旨を明記するとともに、茨城大学ロゴマークと「社会連携センター支援事業」を付記してください。WebやSNSなどで発信する際も同様です。

- (2) 報告書等に添付された事業風景等の写真は、社会連携センターにおいて、ポスター、冊子等に使用する場合がありますので、あらかじめご了承ください。
- (3) 報告書は、茨城大学社会連携センターのホームページ (<http://www.scc.ibaraki.ac.jp/>) および茨城大学図書館ROSEリポジトリいばらき (<http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/>) に掲載する場合がありますので、あらかじめご了承ください。
- (4) 各プロジェクトについては、社会連携センターのコーディネーター等がサポートを行います。

## 10. 注意事項

- (1) 本プロジェクト以外の支援事業へ申請する場合には、本プロジェクトの内容と他事業の内容が重複しないように注意してください。
- (2) デジタルカメラ等については、原則として大学で貸し出しを行いますので、必要とする場合にはあらかじめ社会連携センターまでご連絡ください。
- (3) 購入した物品等はプロジェクト終了後に大学に返還してもらうことがありますので、あらかじめご了承ください。

## 11. 問合せ先

茨城大学社会連携センター

Tel: 029-228-8585

E-mail: [gakupro@ml.ibaraki.ac.jp](mailto:gakupro@ml.ibaraki.ac.jp)